
ランスIF 二人の英雄

散々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランスIF 二人の英雄

【Nコード】

N5750X

【作者名】

散々

【あらすじ】

本来ならば死ぬはずの運命であつた英雄候補であるオリ主が混ざつたランス世界。その存在によって物語はどのように変化していくのか、という感じの作品です。Rance1からのスタートです。

プロローグ（前書き）

原作リスペクトで行きたいと思います。

オリ主以外のオリはモブ以外無し、主人公は現状チートという程強くはありません。

プロローグ

一つの大陸があつた。魂の集合体である存在が、自らの暇つぶしのために創造した大陸。その存在は三体の神を創り出し、大陸の管理をさせた。悲劇と混乱の鑑賞を愉悦とする主を退屈させぬよう、三体の神は争いが永遠に続くようバランスを考え、長い時を掛け世界を構築していった。

魔王… モンスター… ドラゴン… そして人類…

優秀すぎたドラゴンの存在を反省して想像された人類はこの混乱の時代を生き抜くには余りにも弱く、長きに渡り魔王やモンスターといった強大な存在に蹂躪され続けることとなる。

人類誕生から約3500年…

人類は滅びてはいなかった。高い繁殖力によりその数を増し、知識により武器を生み出し、他の種族に対抗する力を身につけていた。

長く魔人の奴隷とされていた暗黒の時代も存在するが、第6代魔王ガイの時代に奴隷から解放されることとなり、各地に国が誕生する。ヘルマン・リーザス・ゼスの三大国だ。これに古くから存在する「APAN」と多くの自由都市の間で、人類同士の争いが長く続くこととなる。魔王ガイの死と、それによる魔人進行からなる地獄が目前に迫っていることも知らずに…

GI1006

- 大陸北西部 とある森中 -

「はあっ…はあっ…」

その男は森の中を彷徨っていた。身につけている鎧はひび割れ、既に防具としての役割は果たしていない。身体中に傷を負っているが、一際目立つのはその胸の傷。モンスターに付けられたのであるうか。その傷の深さから鑑みるに、おそらく…長くはない。

「15年か…流石にもう少し長く生きたかった…かな…」

自らも死期を悟っているであろう。そう男は呟いたとほぼ同時に、背後で物音がする。

「さて…最後まで楽に殺して欲しいものだな…」

自分を殺すであろう相手を確認するため、男は振り返る。

本来、男はここで死ぬ運命にあった。多くの平行世界の歴史の中で、GI1006年以降まで男が生き延びたことはない。

「人間…？ なぜこのようなところに…？」

そこに立っていたのは美しき女性であった。しかし、その存在は人間ではない。魔人。人類を蹂躪する存在が、そこに立っていた。

それは創造神の悪戯か。本来ここで死ぬべき運命であった人間が、仇敵とも呼べる魔人との邂逅により、生き延びることとなる。それは即ち、これより後に起こる人類と魔人の戦争に、多くの平行世界

の中で初めてその男が携わることとなるのだ。

-そして10年の時が流れる-

破壊と混乱の時代…

時代は英雄をもとめていた…

時代がもとめる資質を備えた人物は二人…

だが…

その英雄たる資質を備えた人物の一人は…

とっても自分勝手に

とってもスケベで

とっても乱暴で

とても正義とは思えない男だった。

そしてもう一人は…

これは二人の英雄の物語である。

第1話 出会い

LP0001 7月

- 自由都市アイス -

「今回はこの仕事を引き受けて貰いたい」

とあるギルドビルの一室にある部屋で、男二人が仕事の話をしていた。話を切り出した男の歳は40才後半から50才というところだろうが、成金のような服を身につけ、葉巻に火を付けようとしている。この男の名前はキース・ゴールド、このキースギルドのマスターである。

「そろそろ、お前も結婚したらどうだ。なんなら俺がいい女を紹介してやってもいいぜ」

「ふん、くだらないことを言っていないでさっさと仕事の話をしろ」

それに答えたもう一人の男。薄手のプレートメイルとマントを身にまとい、ふてぶてしい態度で佇んでいる。彼の名はランス、キースギルドに所属する戦士にして英雄たる資質を備えた人物の一人だ。しかし、彼の行動理念は「全ては俺様のために」というものであり、美女とは犯してでもHし、邪魔する奴は皆殺しという、とても英雄とは呼べぬものであった。ただ、その実力は本物であり、いつしか彼は一部の冒険者からは鬼畜戦士という通り名で呼ばれるようになっていた。

「せっかちな野郎だな。まあいい、この写真を見てくれ」

そう言い、白い封筒から取り出した写真には白いドレスを着た赤い髪の美しい娘と、青いドレスを着た黒い髪の娘が写っていた。

「ほー、なかなか可愛い娘たちじゃないか。グッドだ！」

「この娘たちを見つけ出して保護して貰いたい」

「なんだ、人捜しか。何者なんだ」

聞けば、赤い髪の娘はブラン家の次女で名をヒカリ、黒い髪の娘はファン家の長女で名をグアンというらしい。どちらも名家のお嬢様だ。

「ヒカリの方は3週間前パリス学園に通っていて行方不明になったそう。グアンは彼女のルームメイトで、ヒカリを自分で見つけ出すと息巻いていたそうだが、こちらも1週間前から行方不明だ。どちらも身代金の要求はない」

「ふむ、営利誘拐では無いのか。まあ、とにかく助け出せばいいんだろう？報酬は？」

「聞いて驚け、1人救出で20000GOLD、2人で40000GOLDだ！」

「なんだと！破格値じゃないか！どうしたんだ？」

ランスが驚くのも無理はない。普通、この程度の依頼なら1人1000〜2000GOLDが相場になる。それが10倍もの報酬が提示されたのだ。俄然やる気も沸いてくる。

「それだけ大事な娘たちなんだろう」

「がはははは！俺様にまかせておけ、すぐに解決してやる。じゃあな」

「それとグアンの方は…行っちゃったよ。まあ持って行った資料を読めばすぐに気がつくだろう…」

キースギルドを後にし、アジトである貸家へと帰る。そこで受け取った資料に目を通し、情報を整理する。普段であればこんなに真面目に取りかかるようなランスではないが、何せ報酬が報酬だ。その上美女のおまけ付き。ここで俺様がかつこよく助け出せば、感動の余り簡単に股を開いてくれるかもしれない。いや間違はなく開く、などと真面目な顔でとんでもないことを平然と考えていると、部屋の奥から女性が現れる。

「ランス様、お茶が入りました」

お茶を持って現れたこの娘はシル・プラインという。特徴的なピンクの毛こもこ髪で、露出の高い白い装束を身につけている。今から3ヶ月ほど前に奴隷商人から15000GOLDで買い取った魔法使いだ。彼女には特殊な魔法が掛けられており、ランスの命令には絶対服従である。

「あの…次のお仕事、決まったのですか？」

「人探しをする事になった」

簡潔に答え、ランスは資料の続きを読む。邪魔としては悪いと思いい、シルは机の上にお茶を置き、部屋から退出しようとしたが、それはランスの声によって阻まれる。

「なんだと！グアンちゃんはジオの町近辺の洞窟をアジトにしている盗賊団と一緒にいたという目撃情報があるじゃないか！キースの野郎、大事なことを言い忘れやがって！」

「お、落ち着いてくださいランス様」

話の途中でさっさと切り上げた自分の失態は棚に上げ憤慨するラ

ンス。しかし、ランスがここまで怒るのにも訳がある。一つは現在ランス家の貯蓄は底をついており、是が非でもこの報酬は手に入れないといけないのだ。そして、もう一つはキースギルドの方針である。何もこの依頼はランスだけが受けたものではない。希望者が多ければ早い者勝ちというギルド方針であるため、手を付けるのが遅れば他の請負人にみすみす40000GOLDを横取りされかねない。

「急いで準備をしろ、シイル！すぐに出発するぞ！」

「はい、ランス様」

キースに文句を言って無理矢理うしバス代を出させ、ジオの町へと向かう。まだこの依頼を受けたものは少ないはず。今なら一番乗り確実だ。

「がはははは！40000GOLDと美女二人の身体はどっちも俺様のものだ！」

- 自由都市ジオ近辺の洞窟 盗賊のアジト内 -

「へっへっへ、今日も楽しませて貰おうかな」

「もう…家に帰してください…」

「まーだそんなこと言ってんのか？お前はもう一生俺たちの奴隷なんだよ！」

洞窟の奥には捕らえられ、さんざん汚されぬいたグアンと、いかにもな盗賊が二人。本来はもう少し盗賊の人数が多いのだが、他の盗賊たちは今外に出払っているため、アジトには三人だけだ。

「でも大丈夫かね…お頭に黙って勝手に女を連れて盗賊団から抜け出して…」

「まだ心配してんのか？お前だっていつもいつもお頭のおこぼれに預かるのは不満だっただろ？ここはジオ、あっちはリーザス城。見つまりやしねーよ！」

距離的には案外近いため、十分見つかる危険があると思うのだが、そこは短絡思考な盗賊。あっさりと納得する。

「そうだな…他にも賛同してついてきてくらた奴らもいるし、何も恐れることはねーな！」

「その通りだ！こつから俺らの新しいサクセスストーリーが始まるんだ！新かぎらない明日戦闘団誕生の瞬間だぜ！俺が団長な！」

「じゃあ俺は副団長か？文句はないぜ」

「「ぎやはははははは」」

下品な笑い声が洞窟の中に響く。もしかして…本当に一生このまま…グアンは何度も頭に浮かび、その度に考えないようにしてきたことをまた思い浮かべてしまう。

「じゃあ新しい盗賊団の誕生を祝して本日の一発目を…」

「ひつ…誰か…誰か助けて…」

「何回言やあ気が済むんだ？誰も助けになんか来ねーよ！」

「いや、助けは来るぞ。だいぶ遅れてしまったがな」

いるはずのない四人目の声を聞き、盗賊はすぐさま振り返る。その瞬間、副団長だった盗賊の首が飛んだ。団長と名乗った男も、グアンも、状況が飲み込めず呆然となるが、仲間を殺されているのだ。

自分にもこの男は向かってくるだろう。短剣を腰から抜き、目の前に立つ男に向かい声を荒げる。

「てめえ…なんにもんだっ！ぶち殺されてーのか！」

「名乗る必要があるのか？…今から死ぬ奴に」

- 盗賊のアジト入り口 -

「ふんっ、手間取らせやがって。ここがアジトで間違いなさそうだな」

洞窟の前にはランスとシル、そして先ほどまで盗賊だった肉塊が5つ。ランスたちは運のいいことにアジトに戻る盗賊たちを偶然目にし、うしバスを途中下車してついでしてきたのだ。そしてアジトの前についたと同時に用済みとばかりに後ろから不意打ちを仕掛けた。何人かには反撃してくるが、こんな盗賊に手こずるランスではない。みるみるうちに全員を皆殺しにした。

「さーて、グアンちゃんを俺様がかっこよく助けて一発やらせてもらおう」

「待ってくださいランス様、洞窟の中から誰か出てきます」

「んっ？…なんだとおお！」

洞窟から出てきたのは二人。薄手の鎧とロングソードを装備した、どこからどう見ても冒険者である黒髪の男。両腕でグアンを抱えている。助かって気が抜けてしまったのだろうか、気を失っている。

「ま…間に合わなかった…」

「ん？おたくらは…なるほど、俺同様、依頼を受けた冒険者か。殺す直前に仲間が帰ってくるとか言っていたから警戒していたが、あんたらが片付けてくれたのか」

「あ、はい、そうです。私はシイルといいます。こちらはランス様で、私のご主人様になります」

グアンを抱えた男はそうランスとシイルに向かって話しかけるが、ランスは何かを考え込んで返事をしない。訝しげにランスを見ると、考えがまとまったのか、ランスがしゃべり出した。

「よし、殺そう。そうすれば金も美女も俺様のものだ。我ながらグッドアイデアだな、がはははは！」

「いきなりとんでもないことを言うな、あんたの主人は…」

「むっ、何を勝手に馴れ馴れしく人の奴隷に話しかけているんだ貴様」

「ランス様…一応自己紹介は済ませました…」

「なんだと、勝手なことをするなシイル、ええい、こうしてやる！」

「ひんひん…痛いですが、ランス様…」

両拳でシイルの頭をぐりぐりとし始める。余りにも理不尽な光景である。

「一応ほとんどの盗賊を片付けてくれた礼に、報酬を分けてやってもいいと思っただけなんだが…」

「なに？それを早く言え。なかなか下僕として見所のある奴じゃないか。分けると言わず全部寄越してしまってもいいんだぞ？」

シイルを解放し、ランスはまだ名も知らぬ冒険者に向き直る。

「ふふっ、おもしろい奴だな、あんた」

「で、貴様の名前はなんというのだ？男の名前など覚える気はないが、こっただけ名乗っているのは気に食わん」

「ああ、名乗りが遅れたな、すまなかった」

それは、本来ならあり得ぬ出会い。世界の理から外れた男たちの邂逅。この出会いが人類同士、果ては魔人との争いに終止符を打ち始まりであったことを、このときはまだ誰も知らなかった。

「俺の名はルーク。キースギルド所属の冒険者だ」

第1話 出会い（後書き）

「人物」

ルーク・グラント（オリ主）

LV 45 / 200

技能 剣戦闘LV2 対結界LV2 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。歳は25才でランスの7つ上。本作の主人公の一人で、英雄候補。GI1006年に行方不明となるが、GI1015年にキースギルドに戻ってきてキースを驚かせた。その間の動向は謎に包まれている。

ランス

LV 10 / ∞

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。本編の主人公にして、本作の主人公の一人。英雄候補。才能限界に上限が無く、世界のバグとされている。

シイル・プライン

LV 13 / 35

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ランスの奴隷の魔法使い。ランスのベストパートナー。

「技能」

対結界（オリ技能）

結界を無効化する。LV1で魔法結界などの人類の生み出した結界を、LV2で魔人の無敵結界をも無効化し、直接ダメージを与えることができる。魔剣力オスや聖刀日光と違い、効果は本人のみで

周りの人間がダメージを与えられるようにはならない。ランスの才能限界同様世界のバグであり、ルークのみが保有する技能である。

第2話 奇妙な協力関係

- ジオの街 酒場 -

街の外れにある小さな酒場。そこそこに繁盛しているようで、店内には多くの冒険者たちがいた。冒険の成果を喜び合うもの、静かに飲むもの、酔いが回って口論を始めるもの、酒場の風景としてはよくあるものだろう。その酒場の奥のテーブルにランスたちはいた。

「おごつて貰うのはいいが、分け前はまた別だぞ。わかっているな」
「わかってるって。人の好意は素直に受け取るもんだぞ」

水割りを片手にランスがルークに念を押す。ここの払いは全額ルーク持ちだ。先の礼も兼ねてというのが一つ、一応ギルドの先輩だからというのがもう一つの理由だ。

「しかし酒はまあまあだが、料理が不味いな。こんなに不味いへんでろばなど俺様は認めん」

「酒場の料理なんてこんなもんだろ。ほれ、シルちゃんも遠慮せずには食べな」

「すいません、いただきます」

奢りでありながら文句ばかりのランスに呆れながら、ウォツカを一口飲み、シルにうはぁんを勧める。

「で、仕事の話に戻ろうか。グアンちゃんから聞いた話だと、ヒカリちゃんをさらったのは女忍者だったらしい。深夜にシャワーを浴びていたところを襲われたとのことだ」

「女忍者ねえ…そんなもんがまたいたのか」

「まあ大陸にいるのは珍しいな。JAPANではいまだに多く存在するようだ」

グアンは酒場の近くにある宿で寝かせている。宿に運んだあたりで一度目を覚まし、誘拐時の状況をルークに話してくれたのだ。その後は疲労からか、すぐにまた眠り込んでしまった。

「ヒカリちゃんとグアンちゃんの誘拐は全くの無関係だな。一人救出出来たのはめでたいが、ヒカリちゃんの件は情報を集める必要があるな」

「忍者が犯人などたいした手がかりにもならんぞ、まったく…」

「とりあえず俺はグアンちゃんをリーザスに送り届けて、その後はリーザスで情報収集をするつもりだ。そっちはどうするんだ」

「ふむ…シル、お前パリス学園に入学して情報を集める」

「えっ、学校に行かせてもらえるのですか？」

「ふっ…」

急に話を振られたシルはよくわからない返事をする。しっかりといると思っていたが、思ったより天然なのか？と考え、ルークは少し笑ってしまった。

「ばか、情報を集めるんだよ、情報を。ヒカリちゃんと親しかった友達などを中心に調べろ」

「はい、わかりました」

「がはははは、グアンちゃんの分の20000GOLDは山分けになっちゃったが、もう20000GOLDは必ず俺様が全部もらうぞ！」

「まったく、いつから分け前が半分になったんだ…で、ものは相談なんだが、この事件お互いに協力し合わないか？」

「は？いきなり何を言い出すんだ？俺様は男と協力し合う気はないぞ」

「いや、こちらとしては早く救出して親御さんを安心させてあげたくてな。それにそちらは知らないだろうが、この案件いつも以上に急ぐ必要があるぞ」

きつぱりと協力の申し出を断ったランスに対し、ルークは意味深なことを言い出す。

「どういうことですか？」

「ええい、もったいぶらずにさっさと急がなきゃいけない理由を話せ！」

協力する気のなかったランスも話の内容は気になったのか、飲み干したグラスを机に強く置き、声を荒げる。

「いや、俺が仕事を受けた段階でラークとノアもこの案件に興味を持っているって話をキースがしててな。今の仕事が付いたら間違いない乗り込んでくるぞ」

「げっ、あいつらか…ノアさんはかわいいから許すが、あの野郎弱いくせに調子に乗りやがって…」

ランスが嫌な顔をするのも無理はない。ラーク&ノアといえは美男美女コンビとして有名な冒険者で、今までにいくつもの困難な事件を解決してきた強者だ。キースギルド所属の冒険者の中ではトップクラスに名前が売れており、彼らがこの案件を引き受けたら20000GOLDとヒカリちゃんゲットの計画に暗雲が立ちこめる。

「むむむむむ…」

「報酬は5：5。お互いにいい提案だと思うがね？」

いつもならば、どうせ俺様が一番に解決すると断っていただろう。しかし、今は本格的に金がないのだ。先の分け前を無理矢理折半に持ち込んだが、10000GOLDでは借りている金を返したら、しばらく遊んで暮らすには心許ない。やはり最低でも20000GOLDは欲しい。それに…

「ぐぬぬぬ…そうだな、今回だけは協力してやらんこともない。ただし、報酬は7：3だ！こっちは2人だからな」

「オーケー。6000GOLDでも破格だし、別にいいぜ。これからしばらくは協力関係だな。仲良くしようぜ」

「よろしく願います」

「ふん、男と仲良くする気などないわ」

シイルが返事をする横で、追加できた水割りを飲みながら悪態をつく。ルークは両の手のひらを上にし、やれやれといった姿を取るが、シイルは内心珍しいこともあるものだと思っていた。いくら時間もお金もないとはいえ、あのランス様が男性と組むなんて…と。

ランス自身気づいていなかったが、先の理由以外にもう一つ組んだ理由が存在していた。ランスは、ルークの雰囲気はどこか懐かしさを感じていたのだ。同じギルドに所属していながら顔を合わせるのとは初めてで、そんなことがあり得るはずがないのに、以前に感じたことのあるような懐かしさ。その理由をランスとルークが知るのとは、かなり先のこととなる…

1 週間後

・リーザス城下町・

シイルは途中入学の審査に楽々合格し、パリス学園への潜入に成功した。ルークはグアンを家族の元に送り届け、リーザスで情報収集を続けている。そしてランスは二人から遅れること1週間、パリス学園がある王都リーザス城へと到着していた。協力関係だとはれないようにするためである。まずランスが目指したのはパリス学園潜入調査をしているシイルから情報を聞く手はずとなっているからだ。パリス学園に到着すると、裏口に回った。女子校なので見つかると面倒だからだ。

「シイル…」

裏口に到着すると、ランスは横にいる人にも聞こえないような小さな声でシイルを呼ぶ。3分ほどでシイルが白い学生服を着て現れた。あのような小声でも呼び出せたのは、初級魔法であるリーダーのおかげである。本来相手の考えていることを読む魔法だが、応用すればこのような使い方も出来るのだ。

「お待たせしました」

「遅いぞばか。で、何かわかったか？」

「ヒカリさんですが、学園長のミンミン先生から特別生徒にされていた優秀な生徒さんだったみたいです」

「ふーん、他には？」

「その他は、なにも」

「使えん」

「すみません…あ、私もミンミン先生から特別生徒にもらったんですよ」

ランスは嬉しそうに話すシイルを見る。こうして見ると白い服が中々に似合っていてかわいいかもしれない。

「あ、ランス様、この服中々似合っていると思いませんか？」

「似合わねえよ、ばか。とりあえずその茂みでやるぞ」

有無を言わず茂みに連れ込むランス。1週間女を抱いていなかったため相当溜まっていたらしい。

「グッドだ」

「ひどいです、ランス様……」

「しっかり調査しておけよ」

一発抜いてすっきりしたのか、ランスはパリス学園を後にし、中央公園へ向かう。今度はここでルークと落ち合う約束になっているからだ。

「ちっ……少し早く着きすぎたか。ルークの奴、気を利かせて早く来ておけてんだ」

「あの……」

声を掛けられ振り向くと、買い物かごを両手に重そうに抱えた娘が立っていた。

「なんのようだ？」

「おサイフを無くしてしまったの。一緒に捜して貰えませんか？」

見れば中々にかわいい娘である。良い事を思いついたと、いやらしい顔をしながら返事をする。

「捜してやってもいいが、報酬は？」

「へ？」

「こっちはプロなんぞ。報酬がないと働かんぞ。ああ、あんたの身体でもいいな」

サイフ捜しにずいぶん大げさなことを言うものである。

「そ…そんな……わかりました…」

顔を真っ赤にしながら、娘は小さな声で言った。これは楽しみだと笑みを浮かべ、どこでサイフを落としたのかを問う。

「あの…この公園なんです」

ランスは公園をぐるりと見渡す。あまり大きな公園でなく、開けた場所でもあるため、サイフが落ちていればすぐに目につくはずだが、見当たらない。

「見当たらんぞ。もう取られたんじゃないのか？」

ランスが振り返ると、そこにいたのはさっきまでの娘だが、服がさっきまでとは違う。黒装束に身を包み、手にはくないとランスのサイフを持っていた。

「ええ、サイフは見つかったわ。ありがとう」

「お、俺様のサイフ…」

「この件からは、手を引いた方がいいわよ。死にたくなければね」

「自分から姿を現してくれるとはな、ずいぶんとお優しい誘拐犯さんなこつて」

突然の声に娘が振り返ると、くないが弾かれ、手に持っていたサ

イフも奪われてしまう。

「これは返して貰うぜ」

「くっ…」

娘は懷から煙り玉を出し、地面に投げる。娘の姿を煙が包み、煙がはれる頃には娘の姿は風のように消えてしまっていた。

「おお、ルーク！助かったぞ。まあ俺様一人でもちゃちゃっと取り返せたがな」

「まあ、そういうことにしておいてやるよ」

「しかしあの女、次にあつたら絶対に犯してやる！」

出し抜かれたのが相当腹に立ったのか、声を荒げるランス。サイフをランスに返し、ルークはベンチに腰掛ける。

「で、何か手がかりはわかったのか？これで何もわからなかったとか言ったら、報酬は9：1になるぞ」

「勝手なことを…一応有力な情報を手に入れたが…この案件、俺らの想像以上にやっかいなものかもしれん」

「どういうことだ？」

日が落ち、辺りが暗くなってくる。そのせいなのか、あるいは別の理由からか、ルークの表情が暗くなる。

「俺が手に入れたのは、ヒカリちゃんと思わしき女性がリーザス城に連れて行かれるのを見たという情報だ。この案件、リーザスのお偉いさんが関わっているな」

第2話 奇妙な協力関係（後書き）

「人物」

ラーク

LV 18 / 35

技能 剣戦闘LV1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むノアと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

ノア・セーリング

LV 15 / 33

技能 神魔法LV1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むラークと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

キース・ゴールド

アイスの街にあるキースギルドの主。ごつい見た目と違い、その経営手腕は本物である。ランスやラークの過去を知っている数少ない人物である。

グアン・ファン・ユーリイ（オリモブ）

ヒカリのルームメイト。原作では名無しで、誘拐事件にも巻き込まれない。名前はアリスソフト作品の「零式」より。ファンの方、すいません。

女忍者

いったい何者なんだ…

「技能」

○○戦闘

その武器での戦闘を得意とする才能。

魔法

攻撃魔法や補助魔法といった魔法を使う才能。

神魔法

回復魔法や浄化魔法を使う才能。

「料理／食材」

へんでろば

シチューのような料理。ランスの好物。

うはぁん

高級果物。

ウオツカ

ヘルマン国の地酒。アルコール度数が高い。

第3話 後に語られる出来事

・リーザス城下町・

「だから、通行手形を持たない方はお通しできません」

「ええい、いいからさっさと通せ」

ランスは今リーザス城の前にいた。昨日ルークからリーザス城の中にいる可能性が高いという情報を聞いたため、朝から城の中に無理に入ろうとしているのだ。

「それ以上すると捕まえて牢獄に入れますよ」

「げっ…とりあえず戦略的撤退だ！」

その場から逃げ出すと公園でルークと落ち合う。ルークの方はいくと、通行手形を手に入れる手段がないか朝から情報収集をしていたのだ。

「強行突破は無理だな。そっちの方は何か手は見つかったか」

「そうだな…それにしても疲れがとれん。若干風邪気味だし。昨晚は誰かさんのせいで街の外で野宿することになったからな」

そう、昨晚二人は街の外で野宿をしていた。それというのはランスが昨晚、一人で宿を切り盛りしているJAPAN出身の奈美という娘に襲いかかり、宿を追いつけられてしまったためだ。因みに奈美は柔道五段の持ち主で、ランスはあっさりと投げ飛ばされてしまい、結局手は出せなかった。

「ふん、あれは俺様のせいじゃない。お前が「JAPAN出身…まさか忍者では…」とか呟くから確かめようとしたただけだ」

「…記憶にないな」

「嘘付け！」

思いつきり目をそらしながら答えては、ランスじゃなくてもそう言いたくなる。

「まあ昨晚のことは置いておいて、話を戻そう」

「お・ま・え・が、始めたんだろぅが！」

「…通行手形は中々持つている人物が少ないみたいでな、どうやら城下町の住民だと酒場のマスターが持つているらしい」

「なんだ、それなら話は早いな」

「…いい加減ランスの行動パターンも読めてきたが、一応聞いておこう。どうするつもりだ？」

「サクツと殺して奪えばいい。うむ、さすが俺様」

「予想通り過ぎて涙が出てきたよ。まあ、殺すのは別にして、とりあえず酒場に向かうか」

城下町の端にある酒場「ぱとらっしゅ」に向かう。途中買い物していたシルと出会い、真面目に潜入調査しろというランスの雷が落ちていた。シルは学園長の頼みと言いかけていたが、問答無用でぐりぐりのお仕置きを受けていた。さすがに不憫である。

酒場に到着し、中に入ると、客は余りおらず、店の中に辛気くさい空気が漂っていた。

「なんだ？ 繁盛しておらんではないか。これなら殺しても誰からも文句は出ないな」

「文句が出ないかは知らんが、この空気はあのマスターのせいだな。明らかに負のオーラを出している。おかしいな…以前にもこの店は

来たことがあるが、もつと剛胆な性格だったと思ったが…」

二人はカウンターに座り、酒を注文する。ランスが今にも斬りかかってしまいそうなので、どのように話を切り出そうか早急に考える必要があるな、とルークが考えていると、幸いなことにマスターの方から話しかけてきた。

「見た目から察するに、あんたら強い戦士なんだろう？少し頼みがあるんだが…」

「ふん、ゆつとくが俺様は安くな」どういう要件だ？」…おいつ」

せっかくマスターと仲良くなる切っ掛けを自らぶち壊しにしてしまいそうだったので、ランスの発言を遮ってルークは聞き返す。ランスは不満そうだ。

「俺の娘が盗賊にさらわれちゃったんだ。救い出して欲しい」

不満そうであつたランスが急に真面目な顔になり、口を開く。

「その娘…美人か？」

「全然関係ないよな、今」

「親の俺が言うのもなんだが美人だ」

「答えるなよ、おやじ…しかも親バカかよ…」

ルークの頭が痛くなってきたのは酒のせいではないだろう。風邪が悪化しなければいいが。

「がはははは、ならこの俺様と下僕その1に任せておけ。大船に乗ったつもりでいろ」

「誰が下僕だ。盗賊の目撃情報なら情報屋の娘から今朝聞いたぞ。」

第3地区の外れだ」

「よし、早速向かってサクツと救出だ！」

「ありがとう、頼んだぞ。ただ報酬はあまり多くは払えなくてな…
800GOLDで頼む」

「いや、500GOLDで良い。その代わり通行手形を譲ってくれないか？」

「ん？あんなもんでいいなら良いぜ。最近は城の中にも行かないしな」

これで娘さえ救えば通行手形が手に入る。殺すことにならなくて良かったとルークはほっとする。ランスも美人の娘と聞いて俄然やる気だ。殺そうとしていたことなど、もう忘れているだろう。

・リーザス城下町近辺の洞窟 盗賊団のアジト・

「最近似たような洞窟を拠点にした盗賊を倒したような気が…何か関係あるのか？」

「何ぶつぶつ言ってるやがる。お前の独り言は二度と信じんぞ。ここがアジトだな。早速入るぞ…なんだ！？生意気にも結界なんぞ張りやがって、これじゃあ入れないじゃないか！」

ランスが喚く横をすり抜け、ルークは結界に触れる。すると結界はルークに対して無効化されたため、ルークは何事もなかったように結界を抜ける。

「なんだ？なぜお前は入れているんだ？」

「ああ、結界を無効化して入っただけだよ」

「なんだ、お前そんな器用な魔法も使えたのか。では俺様も入ると

するか」

魔法という訳ではないんだが…まあ説明も面倒だしいいか、とルークは自らの結界無効化能力の説明を放棄する。というのも、そもそもルーク自身もこの能力に関してよくわかっていないからだ。防御結界や魔法結界を無視できるな、便利だな、程度の認識だ。

「って、入れんではないか！」

「無効化したのは俺だけだからな。結界事態はまだ残ってるから、ランスは入れないぞ」

「ズルだぞ、貴様！これでは美人の女の子を助けられんではないか！俺様も入れろー！」

「大声で騒ぐな、気づかれるだろ…は…はくしょん！！！」

「明らかに俺様の声よりお前のくしゃみの方がかいだろうが！！！」

ゴゴゴゴゴゴ…

風邪気味のルークがくしゃみをすると同時にアジトに掛かっていた魔法結界が解ける。さすがに呆然とする二人。

「…まさかくしゃみで結界を無効化するとは。俺様が爆裂くしゃみと名付けてやろう」

「違うから。どう考えても偶然くしゃみが結界解除の合い言葉だっただけだから」

随分不用心な結界である。まあ盗賊は深く考えていなかったのだろう。意気揚々と洞窟の中に入っていく二人。洞窟内にはいたるところに燭台が立っており、思ったよりも明るく歩きやすくなっていた。思ったよりもちゃんとした組織かもしれない。そうルークが考

えながら歩いていると、分かれ道になった。左に進むと少し開けた場所に出る。ちょっとした小部屋になっており、奥には岩で出来た階段、部屋の中には白髪の盗賊が一人いた。

「なんだ、てめえら？新しく仲間になりしてきたチンピラか？まあいい、俺は盗賊のムララ。奥に進みたきや200GOLD払いな」

侵入者にそんなことをのたまう盗賊。それでいいのかと問いたい。

「あほか、死ねえええ！！」

「ぎゃーーーーー！！」

問答無用で盗賊をぶった切るランスを尻目に、ルークは奥の階段に目をこらした。どうもあの階段にも結界が張ってあるようだ。この盗賊団には魔法使いも在籍しているのだろうか。ランスもルークもガチガチの戦士タイプであり、魔法使いのシイルは今いないため、もし魔法使いがいるとすれば少し面倒だな、と頭を搔く。

「ランス、奥の階段にも結界が張ってあるぞ。俺一人なら先に進めるが…？」

「馬鹿者、美女はこの俺様がかつこよく救わなければならんだ。解除方法を搜すぞ」

「はい、はい…」

二人は部屋の中を軽く見回したが、解除するような仕掛けもなかったため、先ほどの分かれ道に戻り、今度は右へと進んでいく。少し歩くとまた小部屋にたどり着く。棚やベッドが置いてある。どうやら盗賊の詰め所的な部屋らしい。幸いなことに今は中に誰もいない。二人は部屋に入り、結界解除のための手がかりがないかを搜す。

「むう…特に何も見当たらん。そつちはそうだ？」

「俺様の方も見当たらん。ええい、厄介なことしゃがつて。絶対に皆殺しだ！」

「おや、盗賊以外のお客さんは珍しいね？」

と、背後から声を掛けられ二人は身構える。ランスとルークという一流の冒険者が、声を掛けられる直前まで全く気配に気がつかなかったのだ。何者だ…ルークの頬に汗が流れる。振り返るとそこにいたのは壁に埋め込まれた赤い髪のおっさんであつた。

「焦らせやがつて。なんだ貴様は？壁の中にいるとか変態か？」

「僕の名前はブリティシュ。好きで壁の中にいる訳じゃないよ。ここから出して貰えると嬉しいな！」

「結界とは違うな。呪いの類か…？だとしたら出す手段を持ち合わせていないな…」

「そんな…」

後の歴史に刻まれる出会いとは、得てしてこのようなものである。ブリティシュも、ランスも、そしてルークもそれを知る由もないが、この出会いは後に人々の間で語り告がれ、教科書にも載るような出来事となる。

LP0001 8月 二人の英雄がかつての英雄と出会う…と。

第3話 後に語られる出来事（後書き）

「人物」

ブリティシュ

LV 50 / 100

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV2

リーザスの近くにある盗賊団の洞窟の壁に埋め込まれている男。その正体は、今より1500年ほど前にエターナルヒーローと呼ばれるパーティーを率いたリーダーであり、英雄と呼ばれていた。魔法使いシンの禁呪を受け、壁に埋め込まれる。新陳代謝が殆ど無くされており、そのために長寿となる。壁の中での長い年月を経て精神を病み、かつて英雄と呼ばれていた頃の面影はない。

堀川奈美

リーザス城下町の宿「あいすくりーむ」を一人で切り盛りする苦勞人。柔道五段。

ムララ

かぎらない明日戦闘団の構成員。本編ではランスが初めて戦う中ボス的な扱い。しかし、洞窟内を歩いているいもむしDXより弱かったりする。

「技」

リーダー

対象の思考や情報を読む初步魔法。複雑な思考やシールドをされていると読むことが出来ない。

「その他」

エターナルヒーロー

1500年前に魔王ジル討伐のために集まったパーティー。過去から現在に至るまで、これほどの者たちで構成されたチームは無かったという。構成員は戦士ブリティシユ、魔法使いホ・ラガ、神官カフェ、侍日光、盗賊カオスの五人である。GL0533年、その消息を絶つ。

GOLD

この世界の通貨単位。1GOLDは約100円。モンスターの間では、キラキラ光ってきれいなこれを多く持っている幸せになれるという伝説があり、モンスター同士で取り合っており、強いモンスターほど多くのGOLDを持っている。

年号

創世記

Kukuu00012014 魔王ククルククルの時代

AV00010721 魔王アベルの時代

SS00010500 魔王スラルの時代

NC00010960 魔王ナイチサの時代

GL00011004 魔王ジルの時代

GI00011015 魔王ガイの時代

LP0001 魔王リトルプリンスの時代

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団

・盗賊団アジト 最奥の部屋・

「ふへへへ、おら、もつと良い声を上げな」

「いや…もうやめて…」

部屋の中では40才前後と思われる男が少女を犯していた。この男が盗賊たちのリーダー、名をライハルトと言う。周りには部下と思われる盗賊が五人。その内の四人も他の少女たちを犯している最中であつた。その光景を若干冷やかな目で見ているのは、盗賊団唯一の女性構成員だ。

「これだから盗賊家業はやめられねえな。お前らも楽しんでるか？」

「ええ、最高ですぜリーダー。かぎりない明日戦闘団に入って良かったですぜ」

「（…何が最高なもんか。貧しい人たちに盗んだものを分け与える正義の盗賊団だと言われて入ってみれば、中身はただの下衆な盗賊団。さつさと抜きたいが、感づいているのかしつかりとあたしの行動を見張ってやがる…）」

女盗賊が不満そうにしているのを無視し、他の盗賊はご機嫌に話し合う。

「そうだな、俺の作ったこのかぎりない明日戦闘団は最高だ！その内せかいを股に掛けるぜ！」

「おお、さすがですぜ、リーダー！」

「残念だがそんな日は永久に来ないな」

部屋の入り口から声を掛けられ、全員が入り口の方を見る。そこに立っていたのは戦士二人。ランスとルークだ。二人はブリティシュを解放する手段がなかったため、ひとまず彼と別れたのだ。その際、いつか必ず助けに来るとルークが約束すると、ブリティシュは感謝し、階段の結界を無効化する靴の場所を教えてくれたのだった。靴は一足しかなかったが、ルークは自分で無効化できるため、こうして奥の部屋までたどり着いたのだった。

「なんだてめえら、どうやってここまでできた！」

「答える必要はないな。その娘たちを解放して貰おうか」

「面白いことを言うな。俺の機嫌のいい内にさっさと帰りな」

ルークは部屋を見回す。捕まっている娘は一人ではなかった。中にはまだ年端もいかない少女もいた。そのような少女も盗賊たちはお構いなしで、部下の一人が調度犯している最中だった。そのことに静かに怒りを燃やす。

「まあ…こいつらに生きている資格は…ないな」

「当たり前だ。世界中の美女は全て俺様のものだ。あの少女も将来的には美人になっただろうに…むかむか」

「調子に乗るなよ、やっちまえてめえら！！！」

そうリーダーが声を上げると、近くに控えていた部下たちが襲いかかってきた。

「俺様はあのリーダーを殺る。雑魚は任せたぞ」

「ボス一人と部下五人…さり気なく楽な方を選びやがって…しつかりと殺せよ」

「当たり前だ、お前の方はちゃんとあの女盗賊だけは生かせよ。中々に美人だからな」

そう返事をし、ルークは部下五人と対峙する。部屋の中にいた場所が悪く、部下はリーダーに向かうランスの間に割ってはいることが出来なかった。一対一と五対一の構図が完成する。

「随分無謀な男もいたもんだね……悪いけど死んで貰うよ」

部下の中に魔法使いと思われる者がいなかったことに内心ほっとする。負けはしないだろうが、やはり戦いづらくはなるからだ。入り口や階段の結界はどこかで盗んできた魔法製品で張ったのだろう。そう考えながら、ルークはロングソードを逆手に持ち、腰を少し落とす。盗賊たちは何かする気かと身構えるが、まだ振り抜いたところで当たる距離ではない。そのまま突っ込んでくる気だろうか、と女盗賊は考えていると予想外の事が起きた。ルークはそのまま剣を左から右に横払いで振り切ったのだ。当然剣は空を切る。

「恐怖の余り訳わからなくなってるんじゃないかねえか？」

大声で笑っていた男は不意に違和感を覚え、自分の身体を見る。おかしい。なぜ俺の上半身と下半身がずれ……。男の意識はそこで永久に途絶えた。周りの盗賊たちの目が、驚愕で大きく開かれる。

「…真空斬」

自らの放った技の名前を良い、再び構える。今の男を一番先に殺したのにも理由がある。他の盗賊は短剣装備だが、この相手だけ斧を装備していたのだ。二発目の準備をしているのを察し、盗賊たちから血の気が引く。

「あれを使わせるな！突っ込めー！！」

「ふん、技を放つ手間が省けたな」

焦った盗賊たちが迫ってくるのを見て、ルークは素早く真空斬の構えを解き、初めに迫ってきた盗賊を斬り伏せる。長剣と短剣だ、リーチの差がありすぎる。その盗賊は何も出来ないまま倒れ込む。正面の男が倒れきるとほぼ同時に、左右から二人目の男盗賊と女盗賊が攻撃を仕掛けてくる。男盗賊の短剣を剣で防ぎ、女盗賊の攻撃は肩だけで避けながら、彼女の腹に蹴りを入れる。

「がつ…」

女盗賊が倒れ込む際、その手に持っていた短剣を左手で奪い取ると、右の男盗賊に向かって斬りつける。頸動脈を捕らえたようで、ぐあ…と声にならない声を上げながら、血飛沫を上げそのまま崩れ落ちる。

「くっ…くそっ！！」

他の三人と違い、命令するだけで自分は襲いかかってこなかった盗賊がいた。ルークは知らないが、この男が副リーダーだったのだ。典型的な上から命令するだけの臆病で無能な男。ようやく腰から短剣を抜き、身構えるが…

「遅い！」

盗賊が気づいた時には既に目の前に短剣が迫って来ていた。ルークが左手に持っていた短剣を投げたのだ。その刃はそのまま盗賊の額に突き刺さり、その手から腰から抜いたばかりの短剣がこぼれ落ちる。

「ぐっ…命乞いはしない。殺せ…」

腹を押さえながら倒れ込んでいる女盗賊が呻く。

「悪いが殺すつもりはない。あんただけさっきの反吐が出る乱交に参加していなかったからな。女…というのもあるだろうが、あいつらを見る目が明らかに下衆を見る目だった」

「それだけの理由かい？一応あたしも盗賊だよ。ある程度の悪行はしてきている」

「別に時代が時代だからな。盗賊それ全てを否定する気はない。俺ら冒険者も、一歩間違えれば似たようなものだからな」

独自の考えを女盗賊に向かってしゃべると、ふと目を細め若干のさつきを含めた口調になる。

「もちろん…彼女たちの解放を邪魔しようとするなら別だがな」

「いや…邪魔する気はないよ。あたしらの負けだし、ああいった誘拐は正直不本意だった」

「良識があるようでこちらも助かる」

「名前…聞いても良いかい…？」

「ルークだ。あんたは？」

「シャイラ…シャイラ・レスだ」

「良い名前だ。そういえば、ランスはどうしたかな」

目の前の戦いに集中していたルークもシャイラも、ランスとリーダーの戦いに気を向けていなかった。二人が戦っていた方向を見ると、盗賊団のリーダーであるライハルトは既に床に倒れ伏し、命ない肉塊となっていた。その少し奥でランスは先ほどまでライハルトに犯されていた少女を無理矢理犯していた。

「お前なにしてんだーっ!!」

「見てわかるだろう、ナニだ!がはは、グッドだ」

「うつつ、助かったと思ったのに…」

「何を言う。しっかりと助かっているではないか。これはその分の報酬だ」

「無理矢理報酬を貰うな。さて、娘たちを解放しないとな。酒場の親父の娘さんも捜さない…」

「あつ…それなら、私がその娘です…んっ…」

「おお、君があのお親父の娘か。確かに言うとおりの美女ではないか、がはは」

偶然にもランスが犯していた少女が酒場の娘だった。名前はパルプテンクス。あの親父、どんなネーミングセンスだ。ランスがお樂しみの間に他の娘たちの鎖を解き、ようやく事を終えてランスから解放されたパルプテンクスも加えてリーザスに戻ることにした。

「俺は彼女たちを連れて先に戻るが…何でこの洞窟に残るんだ、ランス?」

「ふっ…少しやり残したことがあってな。案内に彼女を置いておいてくれればいい。後で向かうから酒場で待っている」

「まあ案内くらいいいけどな…だがこのアジトはたいしたものは置いてねーぜ」

ランスはシャイラを指し、シャイラがそれに答える。娘たちを早く家まで送り届けてあげたいという思いから、ルークは特にその内容は聞き返さず、先にリーザスへと向かう。結論から言うと、ルークとシャイラは見誤っていた。ランスの性欲をだ。ランスと二人で残ることの危険性は考えていたが、先ほどまでパルプテンクスを犯していたのだ、まさかな…と。ルークが洞窟から出ていったのを見送ると、ランスの目が怪しく光る。

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「あんたらなら娘を救ってくれると信じていたよ、ありがとう」

「もう一杯どうぞ。このブランディ、おいしいのよ」

「確かに飲みやすいな」

カウンターでルークは親娘と会話しながらランスを待っている。助けてくれたお礼の通行手形は先ほど貰い、今飲んでいる酒もサービスだ。

「あんたを気にいつちまった。どうだ、俺の娘を貰ってくれないか？」

「もう、お父さんたら…変なこと言わないで」

冒険者をやっているればこの手の話はたまに出る。慣れたように断りの言葉を入れようとするルークだが…

「それに私…ランスさんの方が…」

さすがに今の発言にはへこんだ。おかしい。さっきまでの洞窟での流れのどこにランスに惚れる要素があった。納得がいかない顔で酒を飲んでいるとようやくランスが到着した。

「あ、ランスさん。先ほどはありがとうございました」

「がははは。何、パルプテンクスちゃんもグッドだったぞ」
「ぽっ…」

「遅かったな。洞窟でいったい何をしていたんだ？」

ルークは顔を赤らめるパルプテンクスに対し、「ぽっ…じゃねーだろ！」と心の中で突っ込みながらランスに問う。

「決まっているだろう、ナニだ！」

「…はっ？」

「シャイラちゃんの身体はグッドだったぞ。おっぱいもでかったし。がはは」

「ちよつと待て…まさか、やり残した事っていうのは…」

「ああ、シャイラちゃんを抱いていなかったからな。涙を流して喜んでいたぞ」

「どう考えても歓喜の涙じゃないだろ、それは！」

「まあ別れ際に「必ずいつかぶっ殺してやる」とは言ってたがな」
「超恨まれてるじゃねーか！」

頭を抱えるルーク。せつかく円満に終わったと思っていたのに、と嘆いていると…

「因みにお前も含まれてたぞ。先に帰ったルークの野郎も絶対殺す！」とか言ってたし」

「理不尽だ…！」

酒場にルークの声が悲しく響いた。

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団（後書き）

「人物」

ライハルト

LV 7 / 12

技能 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団リーダー。装備は大鎌。本編では一応初ボスに当たるが、まず負ける相手ではない。

シャイラ・レス（オリモブ）

LV 3 / 25

技能 剣戦闘LV1 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団の女盗賊にして唯一の生き残り。本編では名無しの女盗賊で、本作同様再登場フラグとも思える言葉を発して去るが、その後22年間音沙汰がない。きっともう出ない。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。本作での再登場の予定は一応あり。ファミリーネームを変えたことにはきつと意味がある。

パルプテックス

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」店主の娘。ランスに好意を抱く。

「ぱとらっしゅ」の親父

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」の店主。意味もなく飲み代を無料にしたりと随分気っぷの良い親父だが、ネーミングセンスはない。

「技能」

シーフ

盗賊としての才能。手癖の悪さともいえる。

「技」

真空斬（オリ技）

使用者 ルーク

剣に溜めた闘気を相手へ飛ばす必殺剣。威力は普通の斬撃と変わらず、ある程度の実力者ならその軌道を読み防ぐことは出来る。風邪気味じゃなく、しっかりと集中できれば連発も可能。後衛にも攻撃できるため、ルークはこの技を重宝している。

「料理／食材」

ブランデー

ポピュラーな酒。よく使われるブランデー表記でないのはアリスソフトのこだわりと言えるだろう。「ぱすちゃ」ではブランデー表記だった気もするが。

「その他」

かぎらない明日戦闘団

リーザス近辺で活動をする盗賊団。ランスとルークの活躍で壊滅した。

第5話 恐怖

・リーザス城下町 パリス学園・

「という訳で俺様たちはこれからリーザス城に入る。しっかりと調査を続けていろよ」

「はい、わかりましたランス様」

パリス学園の裏口でランスとシルとルークの三人が落ち合っていた。お互いの情報の確認と今後の動き方を決めているところだ。

「しかし…まさかヒカリちゃんが初めてではないとはな…」

「そのようです。パリス学園ではこの4年間、毎年生徒が1人行方不明になっていました」

「学園の教師が怪しいな、その辺はしっかりと調べたのか？」

「はい、悪いとは思いましたが一応リーダーの魔法で心を読ませていただいたのですが…特にこれといって情報はありませんでした」

「深いところまで読み取れる魔法ではないからな…潔白と決まったわけではないが…」

「あ、一つ気になることがあります」

「なんだ？さつさと言え」

「生徒で一人だけ心を読めなかった女性がいるんです。恐らくシルドの魔法を掛けているのだと思います」

「普通のお嬢様生徒がか？用心のために親がやった可能性もあるが怪しいな。良い情報だぞ、シルちゃん」

「えへへ…」

「よし、シル。その生徒をマークしろ」

「わかりました。ランス様とルークさんもお気をつけて」

「ああ、ありがとう」

シルと別れ、二人はリーザス城へと向かった。

- リーザス城 -

ルークは驚いていた。ランスの強運にだ。門番に通行手形を見せると中に入れて貰えたので、まずは城に併設されているカジノに入ると、そこで「牢屋にどこから来たのかわからない女性が捕まっている」という情報を聞きだした。その情報を確かめるため、二人はリーザス城に潜入していた。どう牢屋に潜入したものかとルークが真剣に考えている横で、ランスはリーザス城のメイドたちを犯しているだけだった。が、その行動が全て良い方向に行くのだ。掃除をしているメイドを犯せば城の奥に入れるようになる鍵が手に入り、こっそりパンを盗んでいたメイドを犯せば牢屋の鍵が手に入るのだ。こいつは天から愛されている、と真面目に牢屋への潜入を考えていた自分が馬鹿らしくなってきた。いや、だが牢屋の鍵を手に入れた方がいいが、牢番が必ずいるはず。見つければ潜入していることがバレてしまう…どうしたものか。

「何ぐずぐずしている。さっさと行くぞ」

「おい、間違いなく牢番に見つかるぞ。考えなしに突っ込むな！」

ランスは何も考えずに牢屋がある部屋の扉を開けてしまった。焦るルークだが、その目に入ってきたのは居眠りをしている女性牢番だった。

「なんか…どうでもよくなってきたな…」

「訳の分からんこと言っただけで行くぞ」

牢番の横を通り、鍵を使って牢を開けるとそこには一人の少女がいた。髪の色は青く、ヒカリではない。

「大丈夫か？君の名前は？」

「…ユキ・デルです…」

「なぜ牢獄に捕まっているんだ？何かしたのか？」

「…王女様に…無理矢理…」

「王女だと？王女が君をこんなところに入れたのか？」

「…すいません、忘れてください…そうでないと、また私…」

そう言っただけで黙り込んでしまうユキ。その瞳はすでに人生を諦めてしまっているように見えた。助け出してあげたいところだが、鎖につながれており簡単には連れ出せない。それに、ここで鎖を斬って助けてしまうと潜入がばれてしまい、今後動きにくくなってしまう。因みにランスが犯したメイドたちはなぜか二人とも報告する気はないようだった。納得がいかん。

「すまない…今の俺たちは君を助けることが出来ない。少しだけ待っていてくれ、必ず君を解放してみせる」

「がはははは、俺様に任せておけ！」

「…」

牢を後にする二人。部屋を出る直前、牢番が目を覚ましたようだが、「なんだあー…勝手に入ってきたや駄目にやんだじょー…」とか明らかに寝ぼけていたので無視した。

「まさか王女が誘拐に関わっているとはな…本格的にやばい案件だな」

「これでは20000GOLDでも割に合わんな。うむ、救出した

ら報酬を釣り上げよう」

「って言いながら部屋に勝手に入るな。誰かいたらどうするんだ！」

またもランスが勝手に行動してしまう。目の前の部屋の扉を勝手に開けてしまい、運の悪いことに部屋にいた女性に見つかってしまった。

「誰、健太郎くん？あれ、違う人みたい」

瞬間、ルークは全身の毛穴から汗が吹き出すのを感じた。そこにいたのはピンクの髪のおとなしそうな少女。どこからどう見ても普通の女の子で、ルーク自身なぜ彼女にここまでの畏怖を抱くのがわからなかった。しかし、確かに感じる。コイツは…やばい…

「じーっ」

「がはは、俺様がそんなに美男子だからって、そう見つめるな」

「健太郎君のほうがかっこいいもん。それで、おじさんたち誰？」

「おじっ…」

ランスはルークの異変に気づかず、普通に少女と話を続ける。

「がはは、君はかわいいな。とぉー」

「きゃっ！」

唐突にランスが少女のスカートをめくる。白いパンツがあらわになり、ランスはご満悦だ。少女は恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。

「えっちー！」

少女の叫びと同時に、ルークは頭に浮かんだのは死のイメージ。その直後、二人を突風が襲い、部屋の外に叩き出された。壁に打ち付けられる二人。特に大きなダメージはないが、突風が起こった理由がわからず、ランスが呆然としている。

「いててて、今のはいったい何だ？」

「ランス…行くぞ…彼女に、それ以上構うな…」

「おい、勝手に行こうとするな。ええい、こら、待て！」

ルークがこの場を立ち去ろうとすると、ランスは文句を言うが、さっきの突風が多少気に掛かってはいたのが、素直に後についてくる。

「（今は、少しでも早くあの少女から離れなければ…なんなんだ、アレは…）」

・リーザス城 カジノ・

「がはははは、赤の5番で大当たりだ！さあ、脱いで貰おうか、葉月ちゃん」

「あーん、おかあさーん」

がむしゃらにあの場を立ち去って、二人はカジノに来ていた。ランスはのんきに奥で脱衣ルーレットをやっている。エロい顔をした男どもがその様子を眺めていて、ちよつとした人ばかりが出来てしまっていた。

「（ふう…ようやく落ち着いたな…なんだったんだ、あれは…以前

にあの森で彼女の实力を見せて貰った時にもあんな恐怖は感じなかったぞ……」

ルークは心を落ち着けながら、かつての森での生活を思い出す。彼女は元気になっているだろうか……。すると、不意にカジノの店員が話しかけてきた。青い髪の美しい女性だ。

「お客様、先程から顔色が悪かったですが大丈夫ですか？」

「ああ、心配掛けてすまない。大丈夫だ……。ん？失礼だがお名前を聞いても良いかな？」

「ふふ、新手のナンパですか？アキ・デルと言います」

「デル……やはりそうか。もしかして、ユキと言うのは君の近親者か何かかな？」

「……あなた、ユキ姉さんを知っているの？ユキ姉さんはどうなったの？」

「ああ。気持ちはわかるが、少し落ち着いて聞いてくれ。彼女は牢屋に捕まっていた」

「そう……まだ牢にいたのね……早く保釈金を稼いで助け出してあげないと……」

今にも泣き出しそうな顔をしながら、アキは呟く。

「いったい何があつたんだ？彼女はなぜ捕まっている？」

「姉さんは何もしていないのに、王女様に反乱を企てたとして捕まってしまったの。姉さんが……姉さんがそんなことをするはずがない……」

彼女の悲痛な叫びを聞いて、ルークは一つの決意をする。アキは懐から石を取り出し、ルークに手渡す。

「もし…ユキ姉さんのもう一度会つのなら…これを渡していただけませんか？」

「これは？」

「私たちの家に代々伝わるやすらぎの石です。この石が…少しでも姉さんの心をやすらげてくれれば…」

「…任された。必ず姉さんに渡しておくよ」

「ありがとうございます。それと、これは少ないですお礼です」

アキはサイフからGOLDを出そうとするが、ルークはそれを制止する。

「それは貰えないな…それと、保釈金を稼ぐためとはいえ無理に働きすぎては駄目だよ」

「でも…少しでも早く姉さんを助け出してあげないと…」

そう言い残し去ろうとするルークに、アキは小さい声で反論する。それを聞いて、ルークは彼女に一度だけ振り返り、口を開く。

「大丈夫、姉さんはもうすぐ帰ってくるよ。約束する」

騒がしいカジノの中で、ルークのその力強い言葉が、アキの心に大きく響いた。

・リーザス城 客間・

その少女は椅子に腰掛け、足をぷらぷらとさせながら、愛しの彼がはんばーを買って戻ってくるのを待っていた。頭に浮かぶのは先ほどのおじさん二人組。スカートをめくられたのは口大きいお

じさんだった。彼女が今考えているのはその奥にいた黒髪の顔の整ったおじさんのほうであった。

「あのおじさん…初めて見る人だね。なんかいやな感じがしたな…。なんだろう?」

そう独りごちる。ルークほどではないが、彼女も何かを感じていたのだろう。

「んー、そろそろリーザスからも離れなきゃだめかな…。結構この国好きだったんだけどな…。健太郎君が戻ってきたら相談してみよつと」

そう自分の中で決意したところでお腹が鳴る。はんばーがーはまだかな、お腹すいたな、と悲しそうな顔をする彼女は、やはりどこからどう見ても普通の少女にしか見えない。彼女の名は来水美樹。しかし、彼女にはもう一つ名前がある。その名を…

「あーあ…魔王になんか…なりたくないのに…」

魔王リトルプリンセス

第5話 恐怖（後書き）

「人物」

来水美樹

LV 1 / ∞

技能 魔王LV1

現在の魔王。魔王名は「リトルプリンセス」。元々は異世界で暮らす中学二年生だったが、先代魔王ガイにこの世界に連れてこられ、魔王にされる。魔王になりたくない彼女は、追ってきた恋人の小川健太郎と共に、大陸中を逃げ回っている。

ユキ・デル

謀反の冤罪を掛けられ、投獄された女性。投獄前は妹と一緒にパン屋をやっていた。

アキ・デル

姉の保釈金を稼ぐためにカジノで働く女性。勝ち気な見た目とは裏腹に、姉思いの優しい女性。ランスクエストに出なくて泣いたのは筆者だけではないはず。デル姉妹大好きです。

甲州院葉月

リーザス城カジノ店員。脱衣ルーレット担当。的中率1/10で配当3・6倍。

お掃除メイド

リーザス城メイド。お掃除に情熱を掛けている。

パン盗みメイド

リーザス城メイド。手癖が悪く、常にパンを盗んでいる。お掃除

メイドと共に、ランスクエストにて22年ぶりの再登場を果たす。
CG出た瞬間に喚起でうおお！と叫んだのはきつと筆者だけ。

リーザス城門番

通行証をチェックする女の子門番。ちゃんと仕事しているほう。

リーザス城牢番

牢屋を見張る女の子兵士。仕事していないほう。牢番エ…

「技能」

魔王

魔王のみが保有する技能。二級神をも上回る力を手にする。

「アイテム」

やすらぎの石

持っている心がやすらぐ。没落貴族であるデル家に代打伝わる家宝。

「料理／食材」

はんばーがー

美樹が健太郎にパシらせていた料理。

第6話 トーナメント

・リーザス城 牢屋・

その女性は、城を出ることを既に諦めていた。身に覚えのない罪で投獄され、王女に汚されぬいた。余計なことをしゃべれば殺すとも言われた。その彼女の心を未だに繋ぎ止めていたものは、かわいい妹の存在であつた。アキに…出来ることならもう一度会いたい…ギイツ、と牢のドアが開く。ああ、また王女が来たのであろうか。そういえばさつきは見かけない男が二人ほど来ていたが、あれはなんだつたのだろうか。既に誰と話したのかさえおぼつかなくなつてきてしまっている。

「どなた…ですか…」

「ただの冒険者さ。妹のアキさんから頼まれたものを届けに来た」
「えっ…」

アキという言葉にぼやけていた意識を取り戻す。よく見れば、先ほども来た二人の冒険者がそこに立っていた。

「アキに…会つたんですか…」

「ああ、これが妹さんからの預かりものだ。受け取ってくれ」

ユキはやすらぎの石を受け取る。ぐちゃぐちゃに汚されていた心が、落ち着きを取り戻していく。涙が流れるのを止められない。

「アキ…ありがとう…」

ふと、冒険者が後ろにいたもう一人の男に声を掛ける。

「ランス…先に謝っておく…すまん」
「ん？」

言うやいなや、冒険者は持っていた剣を振り抜いた。ユキの足に繋がれていた鎖を叩き壊したのだ。

「えっ…どうして…」

「「ぱとらっしゅ」という酒場は分かるな？その親父に既に話を通してある。二、三日の間そこに隠れていてくれ」

突然の出来事に思考が追いつかない。この人は私を助けてくれたのか。なぜそんなことをする。それに、私が抜け出せば城は大騒ぎになる。

「大丈夫。大騒ぎにはならないし、すぐにまた妹さんとも暮らせるようになる」

「どうして…ですか…」

「すぐに…全てを終わらせるから」

そう言って優しく手を引いて立ち上がらせてくれる。まともに歩くのは久しぶりなため、足下がおぼつかない私を見て、そっと肩を貸してくれる。

「さあ、行こう」

「お名前…聞かせていただいてもいいですか…？」

「ルークだ。妹さんと仲良くな」

・リーザス城　コロシウム・

「悪かったな…これで今後は動きにくくなる」

「ん？ユキちゃんが助かったんだ、何も問題はあるまい。がはは」

そう言って笑い飛ばすランス。器がかいな、とルークはランスを少し見直していた。同時にランスもルークの思わぬ熱い一面が見られ、少しルークの見方を変えていた。

「ああ、つまらないわ、みんな弱い人ばかりで！」

不意にそんな言葉が聞こえてきた。声のした方向を見ると、黄金の鎧をつけた女戦士がいた。

「最近の男はだらしないわね。闘ってもまるで張り合いがない」
「おい貴様、少しばかり生意気だぞ！俺様がお仕置きしてやろうか？」

女の発言に気を悪くしたランスは、怒り心頭で女戦士に突つかかっていく。

「あら？あなたなら私に勝てるって言うの？」

「その通りだ」

「自信満々なのね。それなら、このコロシウムで私と勝負しない？あなたのその自信、打ち砕いてあげるわ」

「むかむか、いいだろう！ただし、俺様が勝ったらやらせてもらうぞ！」

「私が負けるわけないけど、勝ったらね」

「よし、その身体もらった！」

「ふっ…戦いは明日のトーナメントで。しっかりと申し込んでおき

なさいよ。楽しみにしているわ」

「ふん、身体をきれいにして待っているんだな。そういえば貴様の名前は？」

「ユラン・ミラージュ、このコロシアムのチャンピオンさ！」

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「へー、それでランスさんは明日のトーナメントに出ることになったんですね」

「ああ、今受付に行っている」

ルークはパルプテックスと話しながら、酒を飲んでいる。トーナメントの申し込みに時間が掛かりそうだったので、ランスを置いて先に酒場に来ていたのだ。

「親父さん、悪かったな…無理を言って…」

「なーに、良いつて事よ！パン屋のユキちゃんを救ってくれたんだからな！二、三日と言わず一生住み着いてくれてもいいくらいだぜ」

「そうですよ、気になさらないでください。ユキさんは私の部屋で寝ています。よっぽど安心したんでしょうね。気持ち…少しですが分かりますし…」

この親娘は本当にいい人たちだ。言葉にするとまた何か言われてしまうので、心の中で感謝をしていると、申し込みを終えたランスがやってきた。

「がはははは、申し込み完了だ！これで明日の試合に参加できるぞ！」

「お疲れ様です。どうぞ、まずは一杯」

「おう、ありがとうなパルプテックスちゃん」

「ぽっ……」

もうこの状況になれてしまったルークは特に突っ込まず、酒の追加を親父さんに頼む。考えるのは明日、自分がどう動くかだ。ランスがトーナメントに出ている間、自分だけ何もしないわけにはいかない。しかし、城に潜り込むのはもう無理だろう。

「でも…ユランさんは強敵ですよ？大丈夫ですか？」

「そうだな、本人が望めばリーザス軍の副将くらいにだったら十分なれるって評判だしな」

「ふん、俺様の相手ではないわ」

「そうですね、ランスさんは無敵ですものね！」

「がはははは！！」

「あんまりつけあがらせないでくれ、足下救われるから……」

「ユランの必殺技は幻夢剣っていつてな、ありやすげー技だぜ。でも以前酒場で飲んでた奴が、ヒララレモンを鎧に塗っておけば滑って当たらないとか言っていたような」

「む、それは本当だろうな？親父、ヒララレモンをよこせ」

「相手ではないと言っておきながら万全を期す。戦士の鏡ですね、ランスさん！」

「もう勝手にやっててくれ……」

パルプテックスに煽られてどんちゃん騒ぎを始めたランスを見て、さすがにルークは呆れる。器がでかいんじゃないかって、何も考えてないんだな、多分。

「明日の試合に控えて早めに寝ておけよ。で、俺は明日もう一度城下町で聞き込みをしようと思っている」

「ん？何を訳の分からんことを言ってるんだ？」
「は？」

「明日はお前もトーナメントに参加だぞ。定員が32人で俺様が31人目だったから、気を利かせて申し込んでおいたぞ。感謝しろ」
「何勝手なことしてくれてんだ！！」

・深夜 リーザス城 とある部屋・

「…ユキの動向は？」

「…まだわかっていません」

「…あの牢番はクビにしておきなさい。ユキと侵入者を急いで捜すこと。いいわね」

「…はっ！」

「…ふふ、誰に喧嘩を売ったか教えてあげないとね」

・翌日 リーザス城 コロシウム・

「ふんっ！」

「なぜだ…なぜハニワ神は私を見捨て…ぐふっ」

「それまで！ルーク選手の勝利です。ハニーフラッシュの使い手であるおたま男選手を破り、堂々の準決勝進出です！」

司会者がそう言うのと観客席から歓声が沸く。これで準決勝へと駒を進めた選手は三人。ランス、ユラン、そしてルークだ。ルークは出場者用の観覧席に戻っていく。

「ふん、時間を掛けすぎだ！退屈でしかたなかったぞ」

「劳いの言葉くらいかけられんのか」

戻るやいなや文句を言ってくるランス。ランスは一回戦でサイボーグ戦士であるフブリ・松下を、二回戦でくぐつ伯爵を、そして先ほど巨人のこんごを破り一足先に準決勝行きを決めていた。

「その退屈はすぐに終わるさ。次は私とだからね」

「ふん、もうすぐ貴様は俺の女だ」

ユランが話しかけてくる。彼女も危なげなく準決勝行きを決め、次のランスの対戦相手だ。ルークは会場に視線を戻す。今は準々決勝最終試合の最中で、赤髪の男剣士と赤髪の男武闘家が闘っていた。

「次の俺の相手は武闘家かな」

「まあそうなるだろうね。あっちの若い坊やとはモノが違うよ」

そう話しているとほぼ同時に武闘家の拳が剣士の顎に入り、武闘家の勝利が決まった。

「それまで！アジマフ選手、惜しくもここで敗退です！遂に残すところはあと三戦、果たして誰が優勝という名誉とリーザス軍武将とのエキシビションマッチの権利を得るのでしょうか？司会は私、シユリ・セイハジユウ・ナガサキが引き続きお送りします」

会場がまたも沸き立つ。どうやら貰えるのは名誉と挑戦権だけで優勝賞品はないらしい。名誉や挑戦権などどうでもいいルークは先ほどまで棄権しようかとも思っていたのだが、今の武闘家を見て心変わりしていた。あいつと…手合わせしてみたいな、と。

「我らが偉大なチャンピオン、ユラン選手か？」

「あの巨人のこんご選手すらねじ伏せた剛剣の使い手、ランス選手か？」

「華麗な剣技でここまで無傷で勝ち上がってきた柔剣の使い手、ルーク選手か？」

「あるいは…」

司会者の女性が会場をさらに盛り上げる。それに呼応するように、会場は興奮のるつぼと化している。そのとき、先ほど勝ち上がった武闘家が部屋に戻ってきてルークと目が合う。挑発しているわけではないが、その目が互いに語っている。負ける気はないと。

「大陸を旅する武闘家、アレキサンダー選手か？準決勝、まもなく始まります！」

第6話 トーナメント（後書き）

「人物」

フブリ・松下

トーナメント出場者。身体全体の内、60パーセントが機械化しているサイボーグ戦士。

くぐつ伯爵

トーナメント出場者。脳をえぐるのが最高の楽しみという、恐ろしい男。

こんご

トーナメント出場者。トロール殺しの巨人で、身長は2メートル60。

おたま男

トーナメント出場者。なぜか人間なのにハニーフラッシュを使える。

アジマフ・ラキ（オリモブ）

トーナメント出場者。準々決勝でアレキサンダーに敗れた若き戦士。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

シュリ・セイハジュウ・ナガサキ（オリモブ）

コロシアムの受付兼司会者。大会と言えばこの人。年齢は不明。名前はアリスソフト作品の「闘神都市」シリーズより。

「技」

ハニーフラッシュ

使用者 ハニー族 おたま男

ハニー族が顔の穴から放つ衝撃波。 防御力無視、絶対命中という厄介な技。

「料理／食材」

ヒラレモン

柑橘系の果物。 別名ヒラミレモン。 日常的に料理によく使われるが、値段は高価。 一つ2000GOLDが相場。

第7話 惹かれあう強者たち

・リーザス城 コロシウム・

「はっ、想像以上だよ！私の剣をここまで防いだ男は初めてだ！」

「ふん、当然だ。ええい、俺様の攻撃を避けるんじゃない！」

「嫌なこつたね！」

舞台では準々決勝までとはレベルの違う攻防が繰り広げられていた。金属が衝突し、火花を散らす。ユランは絶え間なく攻撃を仕掛け、手数で多さでランスを圧倒する。一見、ユランが圧倒的優勢にも見える。我らがチャンピオンの優勢を感じ、観客たちは大いに盛り上がる。

「ユラン選手、攻め続ける！ランス選手もそれをギリギリで捌き、なんとか持ち答えています！この状況をどう見ますか？」

実況席のシュリが隣に解説にやってきていたリーザス兵に問いかける。彼が優勝した選手とエキシビジョンを行う予定の兵士だ。髪の色は金、美男子という言葉がピッタリなほど整った顔立ちをしている。

「そうですね…一見押しているのはユラン選手のようにも見えますが…優勢なのはランス選手の方ですね」

「えっ！主導権を握っているのはユラン選手のように見えますが？」

「確かに手数で押しているようにも見えますが、その実攻撃は全て防がれています。一撃たりともランス選手に届いていません。ユラン選手の素早い攻撃を見切る動体視力、そして攻撃の先読みをする

戦士としての勘。申し分ないですね。それに……」

解説の男が言いかけた瞬間、ランスが動く。ユランの連撃の中、一瞬の隙を見つけて剣を振り下ろす。不意を突かれた形になるユランだが、すんでのところで攻撃を躲し、バックステップで距離を置く。ランスの攻撃は地面に当たる。

「むかむか、避けるな卑怯者！」

「（ふざけるんじゃないよ、なんだこのでたらめな威力は）」

ユランが文句を言いたくなるのも無理はない。今の一撃で地面が大きく抉れているのだ。

「ご覧の通り、ランス選手の攻撃は剛剣。もし命中してしまえば、おそらく一撃でユラン選手はリングに倒れるでしょう。ユラン選手はいつ、どこからでも逆転負けの可能性がある。精神的にかなりの負担となりますね」

「なるほど……参考になります。手数 of ユラン選手か、一撃のランス選手か？どちらがこの勝負を制するのでしょうか！」

再びユランが連撃を仕掛け、それをランスが捌く形となる。が、どうしてもユランが攻めあぐねる。互いに決め手に欠ける状態が続く中、先に動いたのはユランであった。ランスの攻撃のパターンを読み取り、避けた直後に下がるのではなく前に出たのだ。

「おおっと、ユラン選手、あの剣の軌道は……！」

このコロシムに通うモノならば誰しもが知っている。チャンピオン、ユランの必殺剣。コロシムで多少強かった対戦相手も、全てこの剣の前に倒れてきた。剣の軌道が妖しくも美しく流れる。観

客も、そして目の前に対峙するランスも、その剣の軌道を目で追ってしまふ。

「（認めよう…あんたは私より強いよ…）」

この技にはユラン以外誰も知らない隠された効果がある。今まで放った相手は、そのほとんどが格下であつたため知られずにいた効果。それは、自分よりも格上の相手に放った場合、その威力が増すのだ。それも、格段に。

「（だからこそ、あんたはこの技で敗れることになる！）」

・その軌道、正に夢幻の如し…・

「幻夢剣！！！」

一閃。流れるような動きをしていた剣が、恐るべき早さでランスの身体に迫る。ランスは反応できていない。その場にほとんどのモノがユランの勝ちを確信した。確信していなかったのは二人。ランスの目を見て、何かあると感じた解説の男と、種明かしを知っているルークだ。ユランの剣がランスの鎧に到達した瞬間、その軌道が曲がる。鎧が滑るのだ。

「なんだって！」

「がはははは、幻夢剣破れたり！」

そう、昨日「ぱとらっしゅ」の親父から聞いていた幻夢剣の破り方を実行したのだ。朝の内にパティという女の子が経営しているアイテム屋でヒラレモンを買い、この試合直前に鎧に塗りたくっていた。攻撃を食らえばユランにばれる可能性があつたため、ここま

で必死に捌いてきたのだ。そして頃合いを見計らって若干の隙を見せる。ワンパターンな攻撃がそれだ。

「まさか…誘われたのか!？」

「がははは、気がつくのがちょっと遅かったな!」

ランスは剣を両手持ちし、頭上からがむしやらに振り下ろす。

「ランスアタアアック!!」

しかし、その軌道はユランではなく、その目の前の地面に振り下ろされる。地面には昨程までとは比べものにならない大きな穴が開く。まさか…外したのか、とユランは思うがそうではない。これはランスの情けか、はたまたこれから抱く女を傷つけたくなかったのか。直後ユランを衝撃波が襲う。とてつもない威力に鎧は崩れ、吹き飛ばされるユラン。発生源はランスアタックが振り下ろされた地面だ。

「（近くにいた衝撃だけでこの威力とは…直撃していたら今頃私は…）」

吹き飛ばされながらそんなことを考える。地面に叩きつけられ、目を開くと目の前に剣を向けるランスが立っていた。

「どうだ、俺様は強いだろう?」

「そうだね…幻夢剣を破る奴が、アリオス以外にもいるとはね…」

「ふっ、負けを認めるな?ユラン」

「ああ…あんたの勝ちだよ、ランス」

そうユランが宣言する。ユランが負けたことにショックを隠せな

い観客も多いが、目の前のこの凄い技を見せられれば納得するしかない。

「それまで！勝者、ランス選手！決勝進出決定です！」

うおおおお！大歓声が上がる。そんな中、少し違うことを考えている男がいた。ルークだ。

「（あの技…よく似ている…ふつ、考えすぎだな…）」

ランスとユランの試合から十分後、会場に開いた穴の整備などが終わり、準決勝二回戦の開始となる。ルークとアレキサンダーが会場に呼ばれる。

「さあ、興奮冷めやらぬ中二回戦です！ルーク選手とアレキサンダー選手、ランス選手への挑戦権を勝ち取るのはどっちだ！試合、開始です！！」

シュリが宣言するとお互いに構える。お互いに間合いを計った後、先に攻撃を仕掛けたのはアレキサンダーだ。

「この試合はどう見ますか？」

「そうですね…申し訳ないですが、相手にならないでしょうね」

「へ？」

予想外の返答に戸惑うシュリだが、ほぼ同時に歓声が沸く。見れば、状況は余りにも一方的。攻め立てているのはアレキサンダー。それをルークが紙一重で躲す。状況的には先ほどのランス対ユランとよく似ているが、ルークは剣で捌くのではなく、その体術だけで

全ての攻撃を躲しているのだ。それだけではない。アレキサンダーに少しでも隙があれば、拳や蹴りをカウンターで入れるのだ。これではどちらが格闘家なのか分かったものではない。

「ご覧の通り、現在立っているレベルが違いすぎます。アレキサンダー選手も素晴らしい才能の持ち主ですが、相手が悪すぎる」

「ではなぜすぐに決着を付けないのでしょうか？ ルーク選手は剣をほとんど使っていませんか？」

「分かりかねます。無駄にいたぶるような選手でもないと思うのですが…」

一番困惑していたのは解説や観客ではない。対戦相手のアレキサンダーだ。遊ばれている訳ではない。これでは稽古だ。それは、大陸を武者修行し、己の力にある程度の自信があつたアレキサンダーにとっては侮辱とも感じられていた。だがどうあがいてもその拳がルークに届かない。もどかしい思いを抱きながら、まだ仕留める気がないルークの戦い方を逆に利用させて貰う。修行中に編み出した渾身の一撃を何としても決めるのだ。

「ルーク選手…確かに…あなたは強い…」

「まあな、悪いがあんたとはレベルが違いすぎる」

「だが…こちらにも意地がある！」

空気が変わる。アレキサンダーの拳を闘気のようなものが覆う。

「全力の拳を叩き込んでこい！次は避けん！」

「！？…その油断が…命取りだ！！」

アレキサンダーが拳を放つ。アレキサンダーは特に技の名前などに拘る人物ではなく、その技を編み出した際、相手モンスターの装

甲ごと破壊したことから、単純にそう呼んでいる。

「この一撃がこの試合の分水嶺…装甲破壊パンチ!!」

その一撃をルークは剣で受ける。が、拳はルークの剣を叩き折り、その刃が宙を舞った。この拳、届いた…アレキサンダーの集中が一瞬切れる。だがルークは動揺することもなく、既に次の行動に移っていた。宙を舞う刃を左手で掴み、右手でアレキサンダーの顔面を掴み押し倒す。一瞬の間にルークがアレキサンダーの上に馬乗りになり、刃をその首に突きつけていた。その動きを目で追いきれなかった観客も、目の前の現状に息をのむ。既に決着が付いているであろう状況の中、アレキサンダーが口を開く。その瞳には涙。

「私は…私自身を許せない…」

「理由を…聞いても良いか？」

「拳が届いた瞬間…私の心は満ち、集中を欠いてしまった…武闘家としてあるまじき恥だ…」

「ああ…それがあんたの敗因だ」

「…まいった」

アレキサンダーのギブアップ宣言が会場に響き、静かになっていた観客も、熱気を取り戻し、歓声を上げる。

「それまで！勝者ルーク選手！決勝進出決定です！」

宣言されると同時にルークはアレキサンダーから離れ、控え室に引き返そうとするが、後ろから声を掛けられる。

「ルーク殿！もしまた…どこかで巡り会ったら…手合わせしていただけませんか！」

「いいぜ。その腕、鍛え上げておけ、アレキサンダー」

そう背中越しに返事をし、奥へと下がっていく。アレキサンダーは自らの拳を見つめ、決意をする。

「（また一から鍛え直しだな…）」

帰りながらルークは先ほどの戦い方に自ら苦笑する。あのような相手を侮辱するような戦い方は本意ではなかった。しかし、せっかく見つけたダイヤの原石。あの程度の実力で満足してしまつては困るのだ。強者を多くしておく必要がある…後に控える、人類の存亡を掛けた大戦のために…

二十分のインターバルを置き、遂に決勝の幕が上がる。観客のボルテージは最高潮だ。

「皆様、大変長らくお待たせしました。いよいよ決勝戦です！果たして栄冠を手にするのはどちらなのか？それでは、ランス選手、ルーク選手、入場してください！」

うおおおおっ！と観客席から地鳴りのような歓声が沸く。が、なぜか二人とも出てこない。観客席からだんだんと不安そうな声がかかる。シュリも二人が出ないことに戸惑っていると、控え室整備の女性従業員パニイが慌てた様子で掛けてくる。

「た、大変ですシュリさん。部屋にこんな置き手紙が…」

「置き手紙？一体何が…」

シュリが手紙に目を通すと恐ろしいことが書いてあった。

・ユランちゃんと一発やってくるので棄権するぞ　がはは　byラ
ンス様・

・涼しい顔装っていたけど正直剣が折れると思わなかった　戦えま
せん　byルーク・

「これを…発表しろと言うのですか…」

「でも…いつまでもお客様を待たせるわけにも…」

絶望の表情に変わる二人。いつ決勝が始まるんだとヤジが飛び交
う。

「…エキシビションが中止になったことを、あの方にもお伝えしな
ければいけないのでここはまかせます！」

「そ、そんな！ずるいですよ、シュリさん！」

「大丈夫、パニイさん、あなたならやれるわ！じゃあ、頑張っ
て！」

「ま、待つてくださああい」

・リーザス城　コロシウム　VIPルーム・

「というわけで、エキシビションが中止になってしまったんです。
無理を言って解説とエキシビションを引き受けていただいたのに、
本当に申し訳ありません」

「いえ、いいんですよ。しかしお二人ともいなくなってしまうとは
…少し残念ですね…」

シュリから報告を受け、先ほどまで共に解説をしていた男はエキ

シビションは残念そうに口を開く。既にエキシビションに備えて甲冑に身を包んでいるところだった。その整った顔は「忠」の文字が入ったヘルメットに隠されていた。

「残念？リック將軍はあの二人と闘いたかったんですか？」

男の名はリック・アディスン。リーザス赤の軍の將軍にして、世界にその名が知れ渡っているリーザス最強の戦士。

「ええ…ですが、いずれまた会う機会もあるでしょう」

「え？それはどうしてでしょうか？」

「あれ程の強者です。いずれ、どこかの戦場で出会いますよ…必ず」

それは同じ強者であるからこそその勘であろうか。まだ誰も知り得ぬ事ではあるが、リックの予想は見事に的中する。これより約八ヶ月後、ランス、ルーク、リックの三人は、肩を並べ、このリーザスで魔人と死闘を繰り広げることになる。

「お客様、物を…物を投げないでくださああああい」

哀れ、パニーさん。

第7話 惹かれあう強者たち（後書き）

「人物」

リック・アデイスン

LV 38 / 70

技能 剣戦闘LV2

リーザス赤の軍將軍。將軍就任の最年少記録を更新し、就任一年目でヘルマン一個軍をたった一人で撤退させるという活躍を見せ、他国からは「リーザスの赤い死神」の異名で恐れられている。人類最強クラスの剣士。

ユラン・ミラージュ

LV 14 / 27

技能 剣戦闘LV2

コロシアムのチャンピオン。軍には所属していないが、その实力は本物である。これより数ヶ月ほど前、勇者アリオス・テオマンと共にとある奴隷商人を壊滅させている。

アレキサンダー

LV 12 / 77

技能 格闘LV2

修行のため世界を回る武闘家。非凡な才能を持ち合わせており、鍛え上げれば人類最強クラスにもなり得る人物である。ルークに敗れ、一から鍛え直すことを誓う。彼も間違いなく強者、いずれまた巡り会うだろう。

パティ

リーザス城下町のアイテム屋「ちゃん」で働いている女の子。一年中下着姿。

夢色・パニイ（オリモブ）

コロシアムの整備員。不憫。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

「技」

ランスアタック

使用者 ランス

ランスの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす。直撃すればもちろんのこと、周りに発生する衝撃波を食らっても大ダメージを受ける。

幻夢剣

使用者 ユラン・ミラージュ

ユランの必殺技。集中力を必要とするため、連発することは出来ないが、軌道が読みにくく、躲すことは困難である。また、格上相手には威力が2倍以上になる。ヒラレモンの汁で滑るという弱点を持つ。

装甲破壊パンチ

使用者 アレキサンダー

アレキサンダーの必殺技。拳を闘気で覆い、渾身の力で相手に放つ。その威力は相手の装甲ごと身体を破壊する程である。

第8話 牽制

・リーザス城 コロシラム外・

「で、ユランとお楽しみで俺の試合は見ていなかったと」

「がはは、当然だ。誰が男同士のむさくるしい試合など見ていられるか。抱いてるときのユランちゃんはかわいかったぞ。普段とギャップがあつてだな……」

「聞く気はない。興味もない。」

「何だ、インポか？男として終わっているな、がはは」

「違うわ！」

決勝戦をバツクれたルークは会場を出たところでランスと落ち合った。あちらも調度ユランとの情事を済ませたところだったらしい。今後の方針を話し合うため、酒場に向かおうとしていた二人に後ろから声が掛かる。

「すみません。少しお時間をいただけますか？」

振り返り、声を掛けてきた女性を見る。白い薄手のローブを身につけた美しい緑髪の女性。高級そうな服装を見るに、王宮関係者であるうか。

「お、美人ではないか」

「私は、王女様の侍女をしているマリスといいます。先ほどのトーナメント、たいへん見事な腕前でした」

「で、その侍女さんが俺たちに何のようだ？」

「王女様が貴方様方のお力をぜひお借りしたいと言われておられます」

なんという幸運。王女の調査が困難になってしまったと思っていた矢先に、あちらの方からわざわざ近づいてきてくれるとは。切っ掛けはランスが勝手に申し込んだトーナメントということを考える、やはりこの男、天に愛されている。

「王女様と言うからには美女なんだろうな？」

「それはもう。あれ程の美しさを兼ね備えた方を私は知りません」

「がははは、では話を聞こう」

「そうだな、こちらにも異存はない」

「それでは案内させて頂きます。私に付いてきてください」

・リーザス城　王女の間・

「はじめまして。冒険者の方なのでご存じないかもしれませんが、私はこの国の王女、リア・パラパラ・リーザスと言います」

そう言っただけで挨拶をしてきたのは優しそうな女性。とてもユキを冤罪で投獄したり、誘拐に関わっているような人物には見えない。

「お初お目に掛かる。私はギルドに所属している冒険者で、名をルークと申します」

「そして俺様が英雄ランス様だ！王女様は可憐だな、100点だ！」

王女様相手にとんでもない挨拶をかますランスだが、それを笑顔で許容する王女。侍女のマリスは無表情で王女の後ろに控えている。

「あなたたちの強さを見込んで一つ頼みがあります。私の大事な魅

力の指輪が妃円屋敷の悪霊に奪われてしまったのです。あなたたちには、その屋敷に行つて悪霊を退治し、指輪を取り返して貰いたいのです」

「王宮の兵士ではなく、なぜ私たちに？」

「それは、この頼みは私の個人的な理由からなるものであるため、王宮の兵士を動かすことは出来ないのです」

「なるほど、そこで強くてかつこいい俺様他一名に頼みに来たわけだな！見返りは？なんなら王女様の処じ」何がいただけるのでしょうか？」

不敬罪で首が飛びかねない発言をしようとしたランスの言葉を遮り、ルークが聞き返す。ふ、と場の空気が変わった。緊迫感が増す。

「…あなたたちは、ヒカリつて娘を捜しているのでしょうか？その娘に関する情報を提供しましょう」

「…どうして私たちがヒカリという娘を捜していると知っているのでしょうか？」

確かにルークはリーザス城下町で聞き込みを一週間ほど続けた。しかしそこはルークもプロ。足の付くような聞き込みはしていない。ルークの問いに、これまで無言で後ろに控えていたマリスが薄く目を開け、静かに答える。

「…我が国の情報網は完璧です」

「…なるほど、大した情報網だ。忍者でも雇っているのでしょうかね？」

「さて…そのような存在が、大陸にいるのでしょうかね…？」

牽制しあうルークとマリス。一瞬の静寂が訪れるが、ランスがそれをすぐに破る。

「わかった、引き受けよう。ヒカリの情報は頼んだぞ」

「ありがとうございます。妃円屋敷の鍵は情報屋の娘が持っていますので、屋敷に行く前に受け取ってってください」

「了解しました。それではこれで失礼させていただきます」

一礼をし、ランスは先に部屋を後にする。続いてルークも部屋から出ようとするが、後ろから王女が問いかけてきた。

「それと…ユキ、という娘の居所をご存じありませんか？」

「…はて、そんなことは冒険者風情ではなく、後ろの侍女に聞いた方がよいのではないでしょうか？この国の情報網は完璧のようですからね」

ルークの挑発にマリスは表情一つ変えず、リアは妖しく微笑む。誘拐に関わっている人物に見えないと思ったが、前言撤回だ。間違いない、こいつらが犯人だ。

- リーザス城下町 情報屋 -

ひとまずランスとルークは二手に分かれた。ルークは情報屋で鍵を買い、ランスは折れてしまったルークの剣を買いに行き、妃円屋敷の前で落ち合う手はずとなっている。パシリのような仕事にランスは難色を示したが、600 GOLD手渡し、余った金で好きなものを買っていいと言ったら喜んで武器屋に向かった。武器を自分が買い、ランスに鍵を取りに来させるのが本来望ましい行動だろうが、ルークが情報屋に来たのは訳があった。彼女をランスに会わせるのは危険だ。情報収集をしている際に出会ったその女性は、とても美

しかった。が、他人に心を開かない。理由はその足にある。ほとんど動かすことが出来ず、車いすでの生活を余儀なくされている。そんな彼女とランスを会わせるのは、ライオンの檻に野ウサギを入れるようなものだ。

「あ…いらつしゃい、ルークさん…」

彼女の名前は朝狗羅由真。ルークが初めてこの情報屋を訪れた際、彼女は心ない冒険者に暴行される直前にあった。ルークはその冒険者をその場で斬り捨て、由真を救っていた。そのこともあり、彼女はルークにだけは若干心を開いていた。

「事情は分かっています。こちらが鍵です」

「流石は優秀な情報屋、耳が早いな」

「いえ…私をもっと早く気がついていれば…お気づきかもしれませんが、事件の犯人は…」

「待った。それ以上はいけない。どこで聞かれているか分からないからね」

言いかける由真をルークは制止する。敵は強大、彼女を巻き込むわけにはいかない。

「…お気遣いありがとうございます…お気を付けて」

「ああ、ありがとう。事件が終わったら、また寄らせて貰うよ」

情報屋を出たルークはついでに正面のレベル屋に足を運ぶ。

「ようこそレベル屋へ。儀式を行わせて貰います」

「ああ、よろしく頼む」

水晶玉に電流が走り、レベルアップの儀式が行われる。彼女の名前はウィリス。優秀なレベル屋で、今度レベル神への昇進試験を受けるらしい。因みに彼氏持ちである。

「駄目ですね、経験値が不足しています」

「そうか、手間を掛けた」

「ルークさんは既にかなりのレベルですからね。これだけ高い人は滅多にいないですよ」

「ありがとう、それでは邪魔をした」

「あ、ルークさん。今つて外は晴れていますか？」

「ん？快晴だが、どうかしたのか？」

「今日この後彼とデートなんですー」

職務中だぞ、この野郎。お幸せに。

- リーザス城下町 妃円屋敷 -

「遅かったな」

約束の時間よりかなり遅れてランスがやってきた。武器屋方面には特にこれと言って足止めを食いそうな施設はなかったはずだが。

「がはは、武器屋のミリちゃん一発やってきたからな」

「人を待たせて置いて…まあ予想通りだが…」

やはり情報屋に向かわせなくてよかった。ますます由真が人間不信になってしまう。

「とりあえず買ってきた剣を渡してくれ。流石に丸腰では、悪霊がいるらしいこの屋敷では危ないんでな」

「ほれ」

ランスが買ってきた剣をルークに手渡す。ルークは受け取るが、その刀身に違和感を覚える。刃がぶるぶると震えている変わった剣。こんなもので敵が斬れるのだろうか。

「ランス…俺の記憶が正しければ、これはあの店で一番安い剣じゃないか？」

ここでルークはランスの装備が大きく変わっていることに気がつく。どれも一流の冒険者が身につけるような良質の装備である。

「さすがリーザス、中々に良い武器を売っているな。その剣とこの一式でぴったりの600GOLDだったぞ。がはは」

「金返せ、この野郎っ!!」

「馬鹿言っつな！貴様のものは俺様のもの、俺様のものも当然俺様のものだ!!!」

口喧嘩をしながら妃円屋敷へ入る二人。すると、今入ってきた扉が勝手に閉まり、どこからともなく悲しげな女性の声が響く。

「…ようこそ妃円屋敷へ。貴方もあの王女の部下かしら…？」

なるほど、これが悪霊か。一筋縄ではいきそうにないな。

第8話 牽制（後書き）

「人物」

リア・パラパラ・リーザス

LV 3 / 20

技能 なし

リーザス国王女。美しい容姿の裏に影を持つ。政治家としても非常に優秀であり、野心家で、既に実の両親である現国王と女王を隠居させる計画も密かに進めている。生まれてこの方人に怒られたことがない温室育ち。誘拐事件の犯人最有力候補。というか間違いない犯人。

マリス・アマリス

LV 25 / 67

技能 魔法LV2 剣戦闘LV1

リーザス国筆頭侍女。事実上リーザスの政治を司っているとさえ言われる影の実力者。戦闘能力も非常に高く、その才能はリーザス最強剣士リックに次ぐが、自ら前線に立つことはほとんどなく、常にリアの側を離れないようにしている。リアを溺愛。

ウイリス

リーザス城下町のレベル屋で働く女性。年下の彼氏とはラブラブ。本編では1の時点では名無しの女性であった。その後、現在までに6作品に登場。大出世である。

ミリー・リンクル

リーザス城下町の武器屋「PONN」の女性店員。自殺願望あり。

朝狗羅由真（オリモブ）

リーザス城下町の情報屋「NET」のオペレーター。コンピューターを使う優秀な情報屋であり、本編では名無しの女性。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。情報戦といえば彼女。

「装備品」

えくすかりば

ランスが購入。伝説の聖なる剣の量産品。200GOLD。

ごっずアーマ

ランスが購入。特殊な金属で作られた高級な鎧。200GOLD。

めでうさの盾

ランスが購入。鏡で出来た優秀な盾。180GOLD。

ぶるぶるの剣

ルークが購入（不本意）。ぶるぶる震えて敵に打撃を与える剣。20GOLD。これでピッタリ600GOLD。因みに本編でも本当にこの値段である。

「アイテム」

魅力の指輪

リアの私物。その名前から魅力が上がると思われるが、多分ただの指輪。

第9話 妃円屋敷の幽霊

・リーザス城下町 妃円屋敷・

「とりあえず二手に分かれて探索しよう」

そうランスに提案するルーク。中々に広い屋敷、わざわざ男二人肩寄せ合って一緒に探索する理由はない。

「うむ、しっかり働けよ」

「何いきなりロビーの椅子に腰掛けてるんだ！そっちも捜すんだよ！」

洪るランスを無理矢理立たせて西にある広間や倉庫の探索に向かわせる。ルークは東にある食堂や厨房、応接間を担当する。厨房を調べているとき、一つのメモ帳を見つけた。悪霊が住み着く前、ここに勤めていた料理人が書いたものらしい。パラパラと中身を確認していくと、気になる一文を発見した。

・王女様のお食事の注意・

「この屋敷には王女が住んでいた…？」

ガタツ、と後ろから物音がし、振り返ると四匹のさけび男がこちらに迫ってきていた。ルークは目の前まで来ていた一匹に斬りつけるが、一撃で倒せない。相手が霊体系のモンスターで物理攻撃が効きにくいというのもあるが、やはり剣が悪い。厨房は狭く、戦い辛かったため、隣の応接間までひとまず移動する。部屋に入った瞬間、暖炉の奥の光る何かが目に入る。どうやら剣のようだ。手に取ろう

としたところに二匹目のさけび男が迫ってきたため、その剣で振り抜くと、さけび男が真つ二つになり消滅した。

「この剣は… 火事場泥棒みたいで申し訳ないが、使わせて貰おう」

残りの二匹も一撃の下に粉碎する。中々の業物。誰も住んでいない幽霊屋敷に置いておくのは勿体ないおぼけが出てしまうと考えたルークは、とりあえず置いておくことにする。冒険者とはこんなものだ。暖炉の奥には代わりにぶるぶるの剣を備えておく。

「何か手がかりはあったか？む、なんだその剣は？俺様に寄越せ！」
「俺の金で新しい剣買ったばかりだろうが！」

ロビーに戻ると西の探索を終えたランスがいた。いきなりたかられるルーク。

「そうだな… この屋敷に王女が住んでいた可能性が高いということくらいだな」

「ふん、使えんな。俺様は倉庫で変な映像を見たぞ。いきなり突風が吹いて、目を開けたら女の子が三角木馬に乗せられて拷問を受けていた。話しかけたらすぐに消えてしまったがな」

「拷問を受けていた女の子… この屋敷の幽霊と関係がありそうだな」
「それとこんなものも見つけたぞ」

ランスが手に持っていたのは、日記帳であった。ルークはそれを受け取り、ページを開く。日記の最後のページには、美しい字体でこう書かれていた。

「また今夜も地獄の時間が始まる。何度死のうと思ったかわからない。でも… 夜9時から11時までの間、この時間が私の地獄の時間」

「これを読んで俺様はこの屋敷の謎に気がついてしまった！どうだ、分かるか？」

「はて…特に新しい情報はない気がするが？」

「ふっ…これが英雄と凡人の差だな。あれを見ろ！」

ランスが指指した先には壊れた柱時計が置いてあった。その時間は10時25分で止まっている。

「この屋敷の時計は10時25分で止まっている。このせいで彼女は死んでも拷問から抜けられないのだろう。つまり、あの時計の時間をずらせば、悪霊はきれいさっぱり消えるというわけだ。がはは！」

「そんな単純な…別にこの屋敷の時計があれ一つという訳でもあるまいに」

「言ったな！ではあの時計で解決したら報酬の分け前は8：2だぞ！」

「関係なかったら6：4な。やれやれ」

呆れるルークをよそに、ランスは時計の時間を12時25分にずらす。何も起こる訳が…と思った矢先、屋敷を覆っていた邪悪な気配がきれいさっぱり消えてしまった。更には奥の厨房の方から大きな音がする。

「なん…だと…」

「がはははは、16000GOLDゲットだ！」

ランスは意気揚々と、ルークはショックを隠しきれない様子で音のした厨房に向かう。すると、地下室への階段が新しく出来ていた。

「おやおや、厨房を散策していながらこんなものも見つけられなか

った冒険者がいるのだな。情けない奴だ、顔を見てみたい。これは分け前が9：1まで有り得るな」

もはやぐうの音も出ない。正反対のテンションで二人は階段を下りていくと、部屋の中央には悲しげな顔で少女が立っていた。その身体は青みがかって若干透けている。

「おお、あの娘だ！さっき俺様が見た拷問を受けていた娘だ」

「彼女がこの屋敷の幽霊か」

「ありがとうございます…あなたたちのお陰で私は地獄の時間から解放されました」

「聞いたか？やはり時間だ、がはは！それじゃあ魅力の指輪を返してくれるか？」

勝ち誇るランスがそう言うと、彼女の周りの光が一瞬暗くなり、彼女は黙り込んだ。

「あの指輪だけは返すことは出来ません」

「なぜ？」

「それは…」

「君を死に追いやったのが…その持ち主だからか？」

ルークの問いに静かに頷き、自分の身に起こったことを語り始める。

「私の名前はラベンダー、パリス学園の生徒です。私がパリス学園に入学したのは二年前でした。そのときの私は、あの学校の真の姿を知りませんでした。学園長のミンミン先生から優秀生徒に任命されてから一週間後、眠り薬を飲まされて…」

「やはり学園もグル…か…」

「気がつくとも王女様の目の前にいました。王女様は私をペットにすると言って…それからこの屋敷に隔離されて毎日、毎日…」

「この地下室で拷問を受けていたわけだな」

「あの王女様は残忍です。私の前にペットにしていたメイドの女性は、狂い死んでしまったから残念だったと、笑いながら話していました。私に残されたのは、自分から命を絶つことだけでした…」

「それでせめてもの復讐に指輪を奪ったというわけだな」

「はい…王女様が憎い…」

小さな唇を噛みしめながら彼女は言った。その目には涙が浮かぶ。

「こうしている間にも、また他の女の子が王女様の餌食になっていると思います」

「それが…ヒカリちゃんか…」

「わかった。俺様が王女を懲らしめてあげよう。それで、君は安心できるかい」

「！？…ありがとう！」

ランスは彼女に抱きつかれる。ランスの腕に、無いはずの質量が少しだけ伝わってくる。彼女はランスの胸で泣きじゃくった。それを静かに見守るルーク。

「絶対に王女様を止めてくださいね。そうしてくれなかったら、化けて出ちゃうから」

「任せろ。まあラベンダーちゃんみたいなかわいい子だったら、化けて出てくれて構わんな。がはは！」

悪戯っぽく言う彼女に対し、ランスが笑いながらそう返すと、彼女は微笑みながら、その身体を少しずつ消していった。どうやら成仏したらしい。後には、彼女が王女から盗んだ魅力の指輪が床に落

ちているだけであつた。ランスはそれを拾い、懐へとしまう。

「随分と無茶な約束をしたな。王女を懲らしめるとは…大国リーザスを敵に回すつもりか？」

「ふん、関係ないな。悪い娘はお仕置きしてやるのがいい男の勤めだ」

「ただではすまんぞ？」

「ユキちゃんを牢から逃がした奴が何を言ってるんだかな」

ランスはルークを見る。知らないものが見れば、ランスの顔はいつも通りの笑い顔であつた。ただろが、ルークの見解は違う。ランスは今、戦士の顔つきになっていた。

「ルーク、とつくにお前もリーザスを敵に回す覚悟は出来ているんだろう？」

「当然だ。あの王女、野放しには出来ん」

ランスが初めてルークの名前を呼ぶ。それに気がついていたかは定かではないが、ルークも戦士の顔つきになり、ランスに笑い返す。二人は肩を並べて、屋敷から出て行った。

・リーザス城下町　パリス学園・

「シイルさん、少し話があるのだけど、ちょっといいかしら？」

シイルにクラスメイトのセラが話しかけてきた。以前ランスに報告していた、思考をシールドの魔法でガードし、考えを読み取ることが出来なかった生徒だ。要注意人物としてマークしていたが、特

に怪しいそぶりは見せておらず、心配のしすぎかとシイルは思い始めているところであった。

「はい、なんでしょうか？」

シイルが振り向いた瞬間、腹部に衝撃が走る。

「えっ…？」

「おやすみ、シイルさん」

倒れていくシイル。だんだんと意識が遠のいていった。

「（ランスさ…ま…）」

それを抱き留めるセラ。彼女の正体は、リア王女の侍女、マリスであった。

第9話 妃円屋敷の幽霊（後書き）

「人物」

ラベンダー

妃円屋敷に出没する幽霊。かつてリア王女に度重なる拷問を受け、自ら命を絶った少女。ランスの腕の中で成仏する。

ラベンダーの前任のメイド（半オリモブ）

ラベンダーの前に拷問を受けて死んだ少女。彼女もこれより数年後、リーザス城に悪霊として出没するようになる。自分の拷問の姿を見せて兵士を怖がらせようとするが、Hな映像であるため男性兵士を喜ばせているだけである。出番はランスクエスト本編で。地下で拷問を受けていたと書いてあったから、おそらく妃円屋敷の被害者。

セラ

パリス学園に通う生徒。その正体はマリス・アマリリス23才。色々な意味で恐ろしい変装である。学園の生徒はきつと見て見ぬふりをしてくれていたのだろう。

「モンスター」

さけび男

アンデッド系。赤いもやが集まって出来たような顔だけのモンスター。物理攻撃が効きづらく、EXPを奪うというような嫌らしい攻撃も仕掛けてくる。

「技」

シールド

リーダーから思考を守る初級魔法。ある程度の魔法使いなら用心のために極力掛けるようにしておく。

「装備品」

妃円の剣

妃円屋敷に隠されていた業物の剣。盾と鎧も存在するが、二人は発見できなかった。

第10話　ここより変わるリーザスの物語

・リーザス城　城門前・

ランスが城門前までやってくる。門番に通行手形を見せて城の中に入ろうとすると、マリスが門から出てきてランスを出迎える。

「ランス様、指輪は手に入れられたみたいですね」

「耳が早いな。手に入れたのはついさっきだぞ」

「リーザスの情報網は完璧ですから。さあ、どうぞこちらへ」

「うむ、案内を頼む」

そう言っただけで案内をしようとするマリスだが、その歩みを止める。

「ところで…ルーク様はどちらへ？」

「指輪を手に入れたのは知っているのに、それは知らんのだな。少し寄るところがあるから、先に俺様だけやってきたのだ」

そう、今この場にいるのはランスのみで、ルークの姿はない。ランスが説明をするとマリスは納得したようで、王女の間へ案内するため、再びランスの少し前を歩き始めた。後に付いていくランスだが、ふと違和感を覚える。

「おかしいな…来るのは二回目だが、こんな道だったか？」

「王女様の部屋までは特殊な結界が張ってあって、私の案内無しでは何者も侵入できません」

・リーザス城　王女の間・

「戦士ランス様、無事に悪霊から魅力の指輪を奪い返していただきましたか？」

部屋に到着したランスに、王女はそう話しかけてきた。マリスは既に王女の後ろに控えている。ランスは先ほど拾った指輪を懐から取り出す。

「これの事か？」

「本当に取り返してくれたのですね。ではその指輪をこちらに……」

「その前に聞いておきたいことがある。屋敷にいた幽霊は、ラベンダーという美少女だった。知っているか？」

言いかけた王女の言葉をランスが遮る。王女は困惑の表情を見せて黙り込んだが、すぐに元の笑顔に戻っていった。

「知りませんわ」

「ふん、まあいい。で、ヒカリちゃんの情報はどうなった？」

「そうでした。マリス、ヒカリをここに」

王女が指示すると、マリスは一度カーテンの後ろに下がる。しばらくの後、カーテンの奥から再び姿を現すと、その横には両手を縛られた少女を連れていた。写真で見ていた少女で間違いない、彼女がヒカリだ。

「ランス様、これがあなたたちお探しのヒカリ嬢ね？」

「ふん、やはりそう言う事か。ラベンダーちゃんの話は正しかったようだな。この変態レス王女め」

ランスがそう言うと、静かに控えていたマリスがカツと目を開き、声を荒げる。

「口を慎みなさい！リア王女に対し、何という事を！」

「残念だけどヒカリは私のかわいいペット。返すことはできないわ。知りすぎてしまったあなたたちもね…もう一人はこの場にいないみたいだけど、どうせ後からのこのことやってくるでしょう。そのときはマリス、ここまで案内して差し上げなさい。目の前でゆっくりといたぶってあげるわ」

そう言い放つ王女。それに対し、素直に返答するマリス。国の上層部にいるものは、得てしてこのような歪みを持ち合わせているものである。それは、リーザスと並び立つ二つの大国、魔法大国ゼスと軍事大国ヘルマンにも言えることである。その歪みがランスとルークの前に立ちはだかるのはもう少し先の話となる。

「がはは、本性を見せたな。ならば力づくで返して貰うまでだ。ついでにレズ王女様にもお仕置きだ！」

王女に飛びかかるうとするランスだが、急に後ろに気配を感じた。振り返ろうとしたランスの首に、細いひものようなものが巻き付く。

「なに！」

後ろから現れた黒装束の娘は、ランスの首に絡ませたひものを締め上げる。もがくランスだが、ひもは外れない。このままでは窒息死してしまう。

「お前は…あのときの公園の…（うぐっ…やばい、このままでは…）」

以前に公園でサイフを盗もうとした女忍者であると気がつく。そこうとうしている間に紐は食い込みを増し、ランスの顔がだんだんと青ざめてくる。ランスの意識が無くなりかけてきたそのとき、聞き慣れた声が部屋に響いた。

「マジックミサイル!!」

部屋の外から炎の塊が飛んできて、ランスの首を絞めていた女忍者を吹き飛ばし、ランスの首のひもが緩む。間一髪で事なきを得たランス。

「ランス様！大丈夫ですか！？いたいいたいなの、とんでけーっ！」

シイルがランスに駆け寄り、ヒーリングの呪文を唱えると、ランスの首に出来ていたアザが消え、息苦しさがなくなっていく。

「げほっげほっ、助けに来るならもっと早く来い、バカ」

「なぜこの娘がここに！？隣の部屋に縛っていたはず！」

そう、シイルは王女の次のペット候補兼、いざというときの人質として捕らえられていたのだ。そのシイルがなぜここに…困惑するマリス。

「理由は簡単。俺が助け出したただけだ」

シイルの後ろから声がする。この場にいなかったもう一人の戦士、ルークだ。

「なぜあなたがここに…」

「以前シルちゃんが優秀生徒になったと聞いていたのを思い出してな。ラベンダーも任命された後に誘拐されたと言っていたから様子を見に行ってみれば、既に誘拐された後。流石に焦ったぞ。まあミンミン学園長を拷問したら、あんたが連れて行ったことをすぐに白状したかな。それでこうして助けに来たわけだ。わかったかい？完璧な情報網を持つリーザスの侍女さん」

「あの学園長…処刑ね」

王女が冷たく言い放つ。後ろに控えていたマリスは、今は王女を守るように前に立ち、ルークに対し、再び問う。

「なるほど…ですが一番聞きたいのはそこではありません。なぜ結界を突破できたのですか！？あなたは魔法使いではないでしょうに！」

なるほど、とルークはマリスの疑問に頷く。確かに普通の戦士であつたなら、あの高度な結界を突破することは不可能だっただろう。しかし、今この場にいる男は…

「誤算だったな。あの程度の結界、俺には何の意味も持たんぞ」
「くっ…」

結局なぜ結界が破れたのかは分からないマリスだが、現実問題としてルークが今ここにいる。状況の悪さから、額に汗が流れる。その状況を察してか、女忍者がルークとランスの前に立ちふさがる。

「リア様、マリス様、ここはお任せを」

その言葉を受け、王女とマリスは部屋の奥に下がり床を持ち上げる。そこには逃亡用の隠し階段があつた。地下へと逃げる二人。

「シル、あそこで倒れているヒカリちゃんの治療をしておけ。ルーク、この場は任せた。俺様は王女を追う。あの王女に説教してやらんとな！」

真面目な顔つきで指示を出すランス。その表情はお仕置きと称して飛びかかるうとしていたときの顔とは違う。その顔を見てルークはそれに答える。

「了解だ。あの王女に世間の厳しさを教えてやれ！」

「簡単に行かせると思わないでよ！」

ランスに対して手裏剣を投げつける女忍者。が、一瞬でランスと女忍者の間に割り込んだルークに、全てはたき落とされる。

「行け！ランス！」

「がはは、俺様に任せておけ！」

そう言い、王女たちを追って地下への階段を下りていくランス。それを追おうとする女忍者だが、ルークに阻まれる。先ほどまでと立場が逆転した。

「さて…ランスが王女の説教係なら、俺はあんたに説教することにするかな」

「説教ですって！？ふざけたことを…死んで貰うわ！」

女忍者は言うど、手裏剣を放つ。それを全てはたき落とすが、目の前から女忍者が消えていた。いや、消えたのではない、飛んだのだ。両手にくないを持ち、空中からルークに迫る。

「死ね！」

「そんな無防備に空中に飛び上がるとは…」

ルークはそう言いながら腰を沈め構える。そして素早く剣を左下から右上に振り切る。発生した真空波が女忍者に直撃する。

「真空斬、手加減版」

「ぐえっ！」

女の子が出してはいけないような声を出して、女忍者が吹き飛ばす壁に激突し、一瞬意識が飛びかけるが、頭を振り立ち上がろうとする。が、それを阻むように首に刃が突きつけられる。

「戦い方がまるで素人だ…隠密要員であって、戦闘は場数を踏んでいないようだな」

「くっ…バカにして…」

懷から手裏剣を取り出そうとするが、一瞬殺気を込められ、「ひっ…」と声を出して手裏剣を取りこぼす。やはり場数はあまり踏んでいないようだ。

「少し…聞きたいことがある」

「何よ…拷問されたって、リア様のことは話したりしないわ」

そう言い放つ女忍者に対し、ルークは予想外の行動に出る。首に突きつけていた剣を下げたのだ。困惑する女忍者。

「王女の事が聞きたいわけではない。あんたの意見を聞きたい」

「私の…？」

「ああ…君は、王女が行っていた今回の犯罪、本当に正しいと思う」

ていたのか？」

「…っ！」

ルークが尋ねた内容に驚愕し、目を開かせる。一瞬言いよどむが、すぐに返事が返ってくる。

「私の意見などないわ。忠臣として、命じられたことに答えるのは当ぜ…」

「それは真の忠臣ではない！！」

言いかけた女忍者の声を、ルークが遮る。先ほどまでの話し方と違い、その一言一言に、迫力が増す。

「忠臣として等と逃げるのではなく、君自身の意見を言ってくれ」

「…リア様が行っていたことに…間違いなどは…」

「罪もない民を自分の快楽だけのために死なせることがか？それが本当に上に立つ者の行動だとでも？」

「…」

ルークの問いかけに女忍者は答えることが出来ない。その拳が強く握られたのは、何に対しての悔しさからだったのであるうか。

「先ほど忠臣と言ったな。真の忠臣であるのなら、主がその道を違えたら、横っ面引っ叩いてでも道を正すものじゃないのか？」

「それでも…自分の意志を殺してでも主の命に従うのが…忍びとしての役目です…」

自分の意志を殺してでもと言ったのを聞き逃すルークではない。先ほどまでの迫力のある喋り方から一転、穏やかな喋り方になる。

「確かに…忍びとしてはそれが正しいのかもしれない。だが、忠臣として…人間として…そして、一人の女の子として、その考えは絶対に間違っている」

自然と涙がこぼれる。情けない、恥ずかしい。涙を止めようとするが、止めることが出来ない。

「私だって…あんなことしたくなかった…でも…恩義に報いるために…」

嗚咽混じりに答える。やはり、彼女の行動は本意ではなかったらしい。ルークがそれを感じたのは以前の公園での出来事。あのように姿を現し、手を引けと忠告するのがそもそもおかしいのだ。殺すので忠告などせずにさっさと殺せばいい。彼女は王女を止めることが出来なかった。だからこそ、巻き込まれて犠牲になる様な人を減らしたかったのだ。彼女もまた、足掻いていたのだ。ルークは女忍者の頭に手を置き、泣き止むまでしばらく待ってやった。シルも気絶しているヒカリを介抱しながら、静かにそれを見守る。少しの後、泣き止んだ彼女は、恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「すみません…恥ずかしいところを…」

「いや、気にしてないさ。恩義っていうのを聞いてもいいかな？」

「命の恩人なんです。祖国のJAPANに帰れず、大陸に行くところもなく彷徨っていた私を、リア様が拾ってくださったんです」

「そうか…」

それは、ただの気まぐれだったのかもしれない。あるいは、大陸には珍しい忍者を貴重に思ったのかもしれない。しかし、あの王女が彼女の命を救った、これは一つの真実なのである。なればこそ、彼女は王女に仕えたのだ。たとえ自分の意志を殺してでも、その恩

義に報いるために。

「因みに…祖国にはどうして戻れないんだ？捨て駒扱いで切り捨てられたとか、何かの秘密を握ってしまつて命を狙われているとかか？」

ぴくつ、と女忍者の動きが止まる。はて、何か変なことを聞いてしまったのだろうか、と考えるルークに対し、言いくそうに彼女が答える。

「…ゆう…でまい…つて…」

「ん？何か言いくいことだったか？それだったら無理しなくても…」

「…研修旅行で迷子になつて…勘違いで抜け忍扱いされて…帰れなくて…」

屋内なのに冷たい風が吹く。女忍者の顔は、先ほどよりも更に赤みを増している。

「んっ…それは…災難っ…だったな…くっ…」

「笑つた！今笑いましたよね！！」

「いや…全然笑つてなんかいないぞ…ぷっ…くくっ…」

「隠せてない！全然隠せてないですから！だから言いたくなかつたのにい！！」

今にも泣き出しそうな顔をしてルークに詰め寄る。ルークは必死に堪えるが、笑いが抑えられない。それを見かねて、シルがフオロ―に入る。

「ルークさん、笑っちゃかわいそうですよ…ふふっ…あははっ！！」

「うわああああん！！！！」

まったくもってフオローになっていなかった。

- リーザス城 地下通路 -

ルークは女忍者を引き連れてリア王女が逃げた通路を歩いていた。途中で気絶していたマリスを拾う。ランスの前に立ちふさがり、返り討ちにあつたのだらう。目覚めたマリスに、先ほど女忍者にしたのと同じような事を言った。

「…返す言葉もございません。リア様のためを常に考え、叱らずにいたことが…甘やかしてしまっていたのかもしれない…」

そうルークに答えるマリス。だが、話を聞いているとその役目をマリスに託すのは酷であつたかもしれない。リア王女とマリスの年の差は7つで、王女が幼い頃から仕えていたため、どうしても妹を見るような目になってしまっていたのだらう。本来、叱るのは親の役目だが、リアの両親は幼い頃から優秀であつた娘を恐れ、遠ざけてしまっていたらしい。彼女のしたことは決して許されることではないが、彼女が歪んでしまった原因を考えると、彼女もまた被害者なのかもしれない。

「まあ、今頃ランスがすっかりと叱っていてくれるだろう」
「大丈夫なんですか？正直…あの男と二人きりするのは危ない気が…」

問いかける女忍者に笑いながら答える。

「まあ、大丈夫だろう。別れ際にかなりまじめな顔をしていたからな。ランスも許せなかったんだろう。まだ出会ってから一月も立ってないが分かる。あいつは…決めるときは決める男さ」

言っていると、目の前に光が差し込む。長い地下通路を抜けた先には泉があった。そのほとりの方で声がする。三人はそちらに向かって走り出した。

「ああっ…もつと、もつと気持ちよくして！」

「がははは、ではもつとお仕置きしてやろう！」

そこにはお仕置きと称して王女とやっているランスがいた。

「はふう…」

マリスが倒れる。目の前の現実に打ちひしがれたのだろう。

「って、やっぱり全然駄目じゃない！何があいつ決めるときは決める、ですか…！」

「キめていたじゃないか…それはもう、バッチリと…」

「何上手いこといった風な顔してるんですか！」

まさか本当に王女に手を出すとは…あの真面目な顔はなんだったんだろうか。ランスにとって王女とHすることは、大まじめな顔をするに価する出来事だったてことか。

「がはははは！どうだ、もう悪いことはしないな？」

「もう悪いことしません、庶民もいじめません。だからもつとおお！」

「まあ…あれはあれで改心したってことでいいんじゃないか？」
「よくなあああああい！！」

・数日後　アイスの街　ランス宅・

無事に仕事を終了し、報酬を受け取ったランスはGOLDで敷き詰めた風呂に入っていた。ルークとの分け前は宣言通り8：2にし、計26000GOLDを手にしたランスは満足そうだった。

「がはははは！大もうけだ！だがGOLD風呂は痛いだけだな、もうやめておこう。」

「よかったですね、ランス様」

あの後、王女が許していたので怒るマリスと女忍者を尻目にしっかりと帰路についたランス。ルークとは今朝別れた。俺様が女を抱く邪魔をしないし、色目も使わん。俺様程じゃないまでもそここの腕はある。まあいても邪魔にはならんな、というのがランスのルークに対する評価であった。

「そうだな、一応奴隷として少しは活躍したからな。お前にも服を買ってやるう」

「本当ですか？私、外出用のお洋服が欲しいです」

「そうだな、すけすけのネグリジェか超ミニスカートを買ってやるう」

「…はい、ありがとうございます…：そういうば、ランス様宛に手紙が届いてましたよ」

「ん？俺様宛のファンレターかラブレターか？」

「お城からの手紙みたいですね」

ランスはシルから受け取った封筒を開き、中の手紙を読む。

「親愛なるランス様。我が王家には、初めて交渉した者と結婚しなくてはならないという

代々伝わる伝統があります。それに従ってあなたは責任をとって私と結婚して頂きます。

ではこれより、すぐにあなたの所に嫁がせて頂きます　王女リア・パラパラ・リーザス・

「…シル、逃げるぞ」

「へ？」

結婚などする気のないランスは逃げようとするが、時既に遅く、家の扉が大きくノックされる。

「ダー……リン……！開けて……！！リアが参りました……！」

声が聞こえた瞬間に、ランスはシルを連れて一目散に逃げ出していた。

「シル！ついてこい！」

「はい！ランス様、どこへでも！」

「アイスの街近辺　街道」

ルークは一人その道を歩いていた。約束の報酬をランスに渡した後、次のギルド仕事を受け、休む間もなくアイスの街から旅立っていた。歩きながら、ルークは思う。面白い奴であったと。またどこ

かで巡り会いたいものだ。すると、遠くから声が聞こえてくる。ルークが歩いている街道の向こう、今考えていた男が、パートナーを連れて王女と侍女から全力で逃げている。最後まで退屈させない奴だ。

「やれやれ…また会いたいとは思ったが、早すぎるだろう…」

そう思うルークに、こちらに気がついた女忍者が道を外れて近づいてくる。

「どうした？王女様から離れていいのか？」

「すぐに戻りますから。ルークさんに…一言お礼を言いたくて」

「礼などいらんさ。今後、リーザスがどのような道程を辿るか楽しみだよ。道を違えそうになったら…」

「私が戻します。今はまだ無理だけど…いつか、真の忠臣と呼ばれるように…」

「上出来だ」

ふと二人が笑いあう。ランスたちが少し離れてしまったので追いかける一礼し、追いかけようとする女忍者をルークは呼び止める。振り返る彼女に、もっと早く聞いておくべきだった事を問いかける。

「名前、まだ聞いてなかったな」

「かなみ、見当かなみです」

満開の笑顔を向けてくる。これは、良い気分で次の仕事に移れそう。青天の下、ルークはそんなことを考えていた。

第10話 ここより変わるリーザスの物語（後書き）

「人物」

見当かなみ

LV 14 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。不本意にも抜け忍になってしまっていたところをリアに拾われ、恩義に報いるため諜報から暗殺まで忠実にこなす。ルークの言葉を受け、少しずつだがリアに自分の意見を言うようになる。意外なことに、関係は以前よりも良好。本編では一応1のラスボス。一応とか言うな。

ヒカリ・ミ・ブラン

ブラン家の次女。リアに誘拐されていたが、実はそのときに色々と目覚めてしまい、リアのことが大好きになってしまう。ランスとルークのことは、気を失っていたのであまり覚えていない。ランス1のサブタイトル「光を求めて」が、彼女の名前と掛かっていることはファンの間では有名である。

ウェンズディング・リーザス

リーザス国国王にしてリアの父。実権は娘に握られている。婿養子であり、結婚前の名前を名乗るなど少し頭がおかしくなり始めている。

カルピス・パラパラ・リーザス

リーザス国女王にしてリアの母。頭の良すぎた娘をあまり良く思っており、知らず知らずの内に遠ざけてしまっていた。

「技」

マジックミサイル

炎の塊をぶつける初級魔法。炎の矢よりも威力は低い、塊であるため敵に命中しやすい。本編では炎の矢の旧名であり同一魔法。後にダイジェスト版が出た際、名前が炎の矢に統一され、その存在が抹消される。本作では別魔法扱い。これは、筆者がマジックミサイルでランスの窮地をシイルが救うシーンが1屈指の名シーンだと思っており、名前を変えなくなかったためである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5750x/>

ランスIF 二人の英雄

2011年10月20日05時17分発行